
エデンの苑

桶明日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒデンの苑

【Zマーク】

Z9068X

【作者名】

桶明日

【あらすじ】

彼女が僕の前から姿を消して一年　西暦は2197年になつていた。

区域Cの外にある世界の退廃は、益々留まることを知らず、いよいよ強く警鐘が鳴り響いていた。

注・自サイト&FC2でも連載中です。

序章 ～過去の残滓 ～ NOKORIKASU～

都会の蝉は鳴くのが遅い。

コンクリートの壁に、地面に、わんわんわんわんとその鳴き声が沁み入る午後のこと。

僕たちが歩く通りには、点々と人為的に木々が植えられていた。頭上を仰げば、その縁が日光に透かされて光っている。

「あつ……」

拭つても拭つても額に汗が滲む。眉を、睫毛を、通り越して目に入つた雲が目にしみて、やけに痛んだ。

「暑いねー」

のんびりと、どこか間延びした口調で、隣を歩いていた女が言った。

その声でようやく存在を思い出し、僕はちらりと横を一瞥する。頭から背にかけて流れるのは、細くて柔らかい髪。今はその髪も、ぎらぎらした真夏の日差しを眩しく反射させている。更に、この夏の盛りにあっても日焼けしない白い頬が、それでも炎天下のためにほんのりと赤く色づいていた。

「暑いねー。氷流君、暑くない？」

彼女はひょい、と僕の顔を覗き込む。くわくわした瞳が、真つ直ぐにこちらを見つめていた。

僕は思わず目を逸らした。

「だから、さつきから暑いと言つてるだろ」

あれ、そうだけ、とその女　白星苑華は笑う。しかしその笑

顔もすぐに引っ込んだ。

「何でこんなに暑いんだろ……。テレの不調かな？」

「いや、ある程度暑くないと、季節感覚がなくなるだろ」

苑華の言つている『テレ』とは『Temperature Regulator』 即ち温度調節器のことだ。

僕たちの住む区域Cは、この国の中核部と言つても過言でない所だった。故に、環境には恵まれていた。

区域Cでは、まず、中心に政治都市がある。説明するまでもないが、そこは国の政治を執り行うための場所だ。次に、それを囲むようにして、事業都市、産業都市があり、ようやく住民都市が広がる。そして、その住民都市を更に覆うようにして存在するのが、壁だ。壁と言つても、万里の長城のようなものを想像されでは困る。壁とは比喩であつて、実際にそれがそびえ立つてはいるわけではない。軍事都市があるのである。区域Cは軍事都市によつて、その外の区域と隔てられているのだ。

つまり、僕らの安心と富に満ちた生活は、大きな籠の中で送られているということだけ、分かつてくれればそれでいい。

さて、前述したように、区域Cという籠の中は複数の重要な都市があるわけで、そのために何不自由なことないよう、人為的に環境を適宜調節していく。長い前置きになつてしまつたが、その一つが『テレ』というわけだ。

つまり、区域Cの中で、熱中症などの体調不良を起こす人間がないように、テレによつていつも適切な温度となるべく設定されているのである。もつとも、四季の変化がないと物足りない、ということで一応、それも考慮に入れてあるらしい。要するに、人間の欲は限界を知らない、ということだ。

他にも、区域Cの中には数多くの設備がある。台風や豪雨がくるのを防ぐために、事前に大規模な低気圧を察知したら、その気圧をコントロールし災害を和らげる、『プレ』。地盤プレートの微細な動きや歪みを感知し、地震を予測する『地震予知機』 通称モリタ5。これはこの地震予知に世界で初めて成功した、日本人物理学者の名から取つたらしい。『5』というのは、予知機は開発されて

から何度も改良されており、現在、五世代目ということだ。

勿論、設備は自然災害対策だけに留まらない。木々や小さな花の一本、作られた自然に住まう動物達や虫の一匹に至るまで、細かくその数が計測されており、増えすぎず減りすぎないよう、監視・制御されている。

また、人間が住まう街には至るところに、監視カメラがつけられ、犯罪を防止すべく働いている。更に空気が汚れないよう、漂う汚染物質を浄化し、浄化できない分は区域Cの外に吐き出す。

見えないもの 即ち情報に関して言及すれば、それには全てフィルターがかけられている。薬や武器など犯罪に繋がるもの、人の墮落を著しく誘うと判断された猥褻なもの、そして賭博に関するものに至るまで、垂れ流しきれないようになっている。区域Cを流れれる情報は、一度、情報部を経由して吟味された後に、許可されたのみのものだ。それは決して、間違つたことではない。世の中に醜惡なものを蔓延させないための、必用な手段なのだ。

区域Cの中にある設備は、これら以外にもまだまだ存在しているが、ここで説明する必用はないので、省略しておく。

とにかくこれらの設備のお陰で、僕らの籠は、一点の染みもなく、汚いもの、穢れたもの、卑しいものが存在しない、清らかな世界として成り立っている。それは人間が人智を尽くして創造した、完璧な楽園だった。

突然、隣に人の気配がなくなつたので、僕は立ち止まる。振り返ると、数歩後ろで、^{そのか}苑華が自販機相手に格闘しているところだつた。僕は彼女の側まで歩み寄る。

「なにやつてんの？」

「チップを受け付けてくれないの。おかしいな……」

苑華は機械から拒絕されたチップを引き抜くと、その端子に息を吹きかけた。そしてもう一度差し込む。すると、小さな台の上に立体映像が映し出された。

「げ、あと一百Mしかない」

苑華はぶつぶつ言いながら、ジューースのメニュー番号を入力する。浮かび上がつた二百の表示が百八十まで下がつた。

スライドしてきた棚の上に、オレンジジューースのカップが二つある。彼女はチップをチーンに通して首から下げた後、カップを手に取つた。

「はい、一つは大好きな氷流君にプレゼントです」

そんな台詞を臆面もなく言いながら、僕の方にカップの一つを突き出す。僕はそれを受け取つた。

「ん、ありがと」

「そこに座ろ」

レトロな雰囲気を漂わせる しかし、妙に場に不釣り合いな木製のベンチを、苑華は顎でしゃくつた。

太陽の位置の関係で、丁度良く自販機が影を落としてくれている。涼しいとは言い難かつたが、それでもいくらかはマシになつた。

頭が暇らしい通行人達が、僕の方をちらちらと見ながら、通り過ぎていく。

一応、断つておぐが、僕らは俗に言つ『恋人同士』という馬鹿馬鹿しくも甘つたるい仲ではない。僕も苑華も大方、一般人とはズレ

た感覚の持ち主だったから、そんなものの必要性を感じなかつたのだ。

わざわざ相手を束縛しあつてどうする。そんな煩わしいものはまつぱら「めんだ。

「んね、氷流君」

不意に、苑華が話しかけてきた。僕は目だけを向ける。

「何?」「

「私こと、白星苑華さんは、氷流君に『報告があります』

彼女はそう言うと、ひらりとベンチから立ち上がつた。彼女の右半身だけが、日に照らされて眩い輪郭を描いている。

「私ね、ここを離れてずっと遠くに行くの。区域の外に出るんだよ。お養父さんのここに行くの」

「はあ?」

あまりにも突飛すぎる話について行けず、僕は一瞬、思考が止まつた。

苑華に実の両親はいない。そのため暫くは施設で育つたが、十歳の時に今の養父に引き取られたと聞いている。だが、その養父とも現在は離れて暮らしており、彼女は長いこと一人暮らしの状態だつた。

「お養父さんつて……今更」

僕が絶句していると、苑華は説明した。

「実は私を引き取つてくれたお養父さんは、は情報社の大手エデンカンパニーの神谷紫苑社長なんです。凄いでしょ?」

僕はまた驚く。

その名前は聞いたことがあつた。無名の情報社を、僅か一年足らずで大手に成長させた強者だ。年齢は四十過ぎといったところだつただろうか、それなりに社会の情勢に興味を持つ人間なら、誰でも知つてゐる有名人だ。

情報社というのは、文字通り情報を商品として販売する会社である。売られる情報には、新聞、雑誌、書籍、音楽、画像、果ては研

究論文まである。エデンカンパニーの場合は、確かにその中でも、研究に関する情報が主な商品だつたはずだ。

情報社が世間に認められて、会社として成り立つのは簡単なことではない。区域Cでは検閲があるから、発信する情報には制限が設けられている。有害なものはないこと、かつ、国民にとつて有益なものを作ること、というそれらの条件をクリアした会社だけが、公に認められてJDSの称号を取ることができる。ここで初めて、一般に流通する情報を販売することができる、というわけだ。

数年前まで、主な情報社は二つしかなかつた。厳しい制度のため、誰かが新しく情報社を立ち上げようとしても、政府の認可が降りず、会社として成りたつ前に立ち消えになつたり、或いはそのJDSの称号を得るために、莫大な投資をして体制を整えようとした挙げ句、会社を運営していくための資金が底を尽き、結局潰れてしまつたり、他の一社の情報社に敵わず倒産したりするのがオチだつたのだ。ところが、エデンカンパニーはそこに台頭してきたのである。最初は誰しもが、また潰れてしまうだろうと思っていたが、エデンカンパニーは持ちこたえた。それどころか、それまであつた二つの情報社を凌ぐ勢いで成長していったのだ。それは偏に、社長である神谷紫苑の手腕によると言われている。

もつとも、一定の分野の中で、**神谷**^{かむや}の知名度が高いのは、それだけが理由ではない。神谷は区域^{いき}の外の人間なのだ。大会社の社長でありながら、^こに住むことのない、いわば変人だった。彼曰く、事業が密集する^この中で開発を進めれば、企業秘密を盗まれてしまう、とか。それが転じて、一部の人間の間で、公にはできない研究を取り扱っているのだ、いや或いは裏で政府と繋がつていて重大な国家研究に取り組んでいるのだ、とまことしやかに囁かれていた。とにかく、そんなテレビや新聞でしかお目にかかるないような有名人に、**苑華**^{そな}が引き取られていたなんて、驚嘆すべきこと以外のなんでもなかつた。

「何で今まで黙つてたわけ？ てか、それマジなの？」

苑華は大真面目な顔でこつくり頷いた。その拍子に、長い髪がさらさら揺れる。

「マジだよ。私、**氷流**^{ひりゅう}君には嘘吐かないもん」

僕はどう返事をしていいのか分からず、唾を飲み込む。その音がやけに耳に響いた。

彼女の瞳は真摯そのもので、とても嘘を吐いているようには見えなかつた。ただ、全てを語つていてるわけではないようにも思えた。「だから、氷流君のことは大好きだけど、あと一ヶ月でお別れです」「なに？ お前、俺のことが好きなのに、どうか行くの？」

意地悪く言つてみる。苑華はその軽口に反応する様子もなく、ごく普通に答えた。

「今すぐって、わけじやないけどね。私、お養父さんのとこで、幸せに暮らすんだよ。羨ましいでしょう？」

彼女はここにこして、いた。僕は馬鹿だから、そこにこしている顔を見て、じく素直にこいつは幸せなんだと思った。だから僕もにこにこした。

「いや別に、勝手にしてくれって感じ」「何それ、冷たーい！」

苑華は声を上げてまた笑つた。

頭上で木々がざわめきを起こす。吹いてきた風は熱氣を帯びていって、あまり気持ちの良いものではなかつた。

「お別れの記念に、一ついいことを教えてあげましょ。私はもう一つ名前を持つていて、昔、『ヒテン』と呼ばれていました。樂園つて意味なの。言わなくても知つてると思うけど」

それは初耳だつたが、僕にとつて特に興味を引くような話ではなかつたので、適当に受け流していた。また、こいつの下手な冗談か、事実を脚色した小話じやくせきだらうとしか思つていなかつたのだ。

「何はともあれ、白星さんは水流君とはお別れです。寂しいでしょう？」

「いや別に」

反射的に即答してしまつ。苑華は今度は笑わなかつた。

「やつぱり冷たいね……」

蝉のじりじりいう鳴き声は、ますます辺りをひたむかく満たし、日差しはいよいよ強く照りつけていた。

それから一月後、苑華は本当にいなくなつた。

いなくなつて初めて、実は自分が彼女に惹かれていたことに気が付いた僕だつたが、もはやどうしようもなかつた。

しかしその想いも次第に薄れていくようになり、彼女のことと思い出す回数は減つていつたのだ。僕みたいな奇人に、どういうわけか、犬みたいにつきまとつていた変わつた女がいたなど、ただその程度だつた。

そう、その程度のはずだつたのに……。

彼女が僕の前から姿を消して一年 西暦は2197年になつていた。

区域Cの外にある世界の退廃は、益々留まることを知らず、いよいよ

いよ強く警鐘が鳴り響いていた。

蒸し暑さの中に、とろとろと入り込んでくる夢。じつじつと窓の中の夢は、あまり気持ちのいいものではない。

起きなくてはいけない、起きた方がいい、というのは頭の片隅では分かっている。分かっているのだけれど、鉛のように重くなつた体はいうことを聞いてはくれず、僕はそのままざぶざぶと眠りの中に引きずり込まれていく。

明るい青い生地に、原色の赤をした金魚が泳いでいた。

また、あいつの夢だ。

どこかで現実にいる僕は、軽い嫌悪を覚えてしまつ。この先の展開が見えてしまつために。

青い生地には、左右からくる橙の灯りで照らされている。それを一部削り取るようにして、影ができるのは、僕が灯りを遮つているからだ。

田の前には、青い浴衣を身に纏つた女が歩いていた。
からん、と下駄の音が響く。気が付けば、女の口ずさむ鼻歌が聞こえるほどに、夢の実体が迫つてきていた。

ずっと、楽しみにしてたんだよ

女は振り返る。屋台の灯りの中で、満面の笑みが輝いていた。
『ずっと』って……今日、いきなり呼び出したんじゃねえか
彼女は後ろ向きに歩きながら、甘い邪氣のある笑みを浮かべた。
でも、白星さんには分かつてたよ、水流君は絶対来てくれる
つてこと

僕は軽く目を見開いて、まるで知らない人間であるかのように、
苑華を見つめた。

苑華は再び、ぐるりと背を向ける。そして、浴衣の袖を蝶のよう
にひらひら振つた。

少し昔の浴衣は、もう少し袖が短いものだったらしい。また、今

のようすに重ね着をして、配色を楽しむこともなかつたようだ。どうでもいい話ではあるが。

いくら夏とはいえ、夜はもう少し涼しいものだと思つていた。しかし、今は「ごみごみとした人の中で、喧せ返るようになつた。周囲を埋め尽くすざわめきが、耳に鬱陶しかつた。

もともと、人口密度の高い場所は苦手だ。すぐ飽きた。気分が悪くなる。

その時、不意に苑華が、ごく自然に僕の手首を掴んだ。

かき氷を買いましょう。でも、氷流君はいつもぼーっとしているので、白星さんは心配です。はぐれないようにしないと少し遠慮がちに、優しく苑華の指が、僕の手首を締め付ける。僕はされるがままになつていた。

いつも、ぼーっとしてるのはそつち。いつも、突然いなくなれるのもそつち

聞いているのかいないのか、苑華はずんずんと人の合間を縫つて、屋台の列に辿り着く。待たされること十数分。僕らの手には、夏色のかき氷があつた。

思つたより時間、取られちゃつたね

行儀悪く匙の先を噛みながら、苑華が文句を言つた刹那のこと。細く高い音が上がつた。続いて、夜空に花火が現れる。無数に広がる光の粒が消えた後、低く重い音が場内に響き渡つた。

人々の間から、感嘆の混じつた歓声が沸き起つてゐる。僕も思わず、頭上で繰り広げられる祭に、見入つてゐた。

花火はね、綺麗だけど、見てると少し切なくなるね
突然、苑華が口を開いた。

何で？

すぐに消えちゃうから

でも、すぐにまた次のが上がるだろ？
だから、尚更だよ。……でも、やっぱり綺麗だな。やっぱり、

好きだな

苑華は、早くも溶けかかってたかき氷の山を突いた。

僕は気付かれないように、横目でそっと彼女の横顔を盗み見る。つん、と軽く上を向いた顎。小さい顔は、花火がうち上がるたびに、様々な色に照らされていた。

細い茶色の髪。色素の薄い瞳孔。色白の肌。

どれをとっても、それは儚い印象を抱かせるのに充分で。昔から、彼女はすぐ近くにいても、限りなく淡い存在のような気がしていた。それは何も、外見から受けるイメージだけではない。彼女の内面から滲み出る、搔き消すことのできないどうしようもない消滅の匂い。

今だから分かる感傷だと、笑われても構わない。だが、それはある種の予感だったのだと、どこかで現実にいる僕は思う。

花火はまだ続いていた。

透明な闇に浮かび上がる色鮮やかな光が、眩い軌跡を描く残像となつて、瞼の裏に残つた。

また、来れたらいいな

僕に言つたのか、それとも単なる独り言なのか、苑華は呟いた。

：

「もしもし？ ちょっと失礼してもいいかな？」

不意に、低い女の声が耳に飛び込んでくる。今までいた世界が一気に遠退き、僕ははっと身を起こした。

「は、はい？」

腰掛けていた木製のベンチが軋む。

まだまだ日差しが柔らかい、初夏の公園。学校帰りに、少しの休憩のつもりで寄ったのだが、いつの間にか眠りこけていたらしい。

口の端から顎を伝う生暖かい感触に気が付き、さりげなく手の甲で拭う。次いで目に飛び込んできたのは、長身の女だった。

やや吊り上がった、切れ長の目。優美な曲線を描く眉。滑らかな頬に映える、紅い唇。無造作に一つに纏められた、見事な黒髪。文句なしの迫力美人である。少なくとも、僕好みの。

ただ、心を許すことによしとしなかったのは、その目だ。

彼女の黒目がちの双眸は、ぞつとするほど澄み、見ているだけでふと吸い込まれそうになる。けれどもその奥には、凶暴な色が潜められていた。一度縛したものは決して離さない、逃げることをよしとしない、強烈な光。まるで肉食獣のような。

妙な女だ、と、そう直観してしまった。

確たる根拠があつたわけではない。でも彼女の持つ感覚質は彼女独特のもので、その雰囲気を何かに例えることができなかつたのだ。

それは僕が今まで見たことのない種の人間だった。

「もしかして、起こしてしまったかな？ それは悪いことをした

ね」

女はくつと喉を鳴らす。バツが悪く、僕は視線だけを下に落とした。

「いえ、別に構いませんけど」

「 そうか？ では遠慮なく……。この辺に碧水学園というのがあると聞いたのだが、もしよければ、案内しては頂けないかな」

丁寧な言葉遣いではあったが、その口調はどこか横柄さを孕んでいた。小首を傾げているが、長い手足の彼女に、その仕草はひどく似付かわしくない。

碧水学園を知らないはずがない。何を隠そう、そこは僕が通う学園なのだ。

「 ああ碧水への行き方なら……」

言いかけて、僕は口を噤んだ。女から漂つてくる、危険な匂いに気が付いたからだ。

鼻孔を乾燥させるような、喉の奥に痛みを与えるような、その香。何の匂いだろう、と一瞬考え、答えに辿り着く。吸うだけで噎せそうになる、実に不快なこの異臭は、火薬だ。

自分で しかも突然 言つのもなんだが、僕は頭がいい。見栄でも誇張でもなく。下手な謙遜は、他人にとつて余計嫌味だから、そんなものはしない。

もう一度言う、僕ははつきり言つて、頭がいい。

だから、その火薬の匂いだけで、 たとえ、覚醒したばかりのため、脳みそに霧がかかっていたとしても 頭の回転のスイッチが入る。

そうだ、よく考えればおかしいではないか。普通の人間であれば、小型のマップを常備しているはずである。それはハンカチやティッシュと同じぐらいに、常に持っているはず物なのだ。

小型マップを持っていない者。それはよっぽど、外に出ることに慣れていないくて準備の悪い人間。……或いは、マップを手に入れられない種の人間。

女が前者の場合 もつとも、見た目からして、その線はなさそうではあつたが そんなだらしのない奴に、僕がわざわざ道のりを教えてやる筋合いなどない。これは、僕が寝起きで苛立つてからではなく、ましてや、僕の性格が悪いからでもない。当然のことである。

質が悪いのは、後者の場合。マップを手に入れられない者 それは区域Cの外の人間だ。

区域Cが保護された世界なら、Cの外は保護されていない無法地帯の世界。犯罪が横行し、貧しい人間が最低限の生活を強いられる世界。そこから来た人間が、まともな者であるはずがない。

そこまでの一連の思考を、一瞬の間に為し、僕は言いかけた言葉

を喉の奥に飲み込んだ。

「知りませんね」

女は片眉をあげた。

「そうか。では仕方がないな。時間を取らせて悪かった。ゆっくり、日向ぼっこの続きでもしてくれたまえ」

偉そうにそう宣うと、女はくるりと踵を返して、公園を出していく。僕は暫くその後ろ姿を見送ったが、思いついてそつと彼女の後をつけてみることにした。

だが、いくつめかの曲がり角で、その端麗な姿を見失ってしまう。僕は落胆と安堵の混じり合った奇妙な気持ちの中で、一つ大きな溜息を吐いた。

しかし、である。

「ふむ。どうやら碧水の生徒は、他人を尾行することを教えてい るらしいな」

その芯の通つた声は、僕の背後からかけられたものだった。

心臓が口から飛び出そうになり、僕は反射的に飛び退く。振り向いた先には先ほどの女が、愉快そうに瞳を踊らせていた。

「え、あ、いや……」

「それとも、その学園バッジは偽物かな？ 碧水の生徒は、優秀だと話に伺っていたのだが、どうやら君は必要以上に、頭がお悪いらしい」

「ああ？」

何だこの女は、喧嘩売つていいのか。

露骨に眉根に皺を寄せてみせたものの、女は一向に怯む様子を見せない。

「あんた、一体……」

なんなんだよ、とそう言いかけたが、それは途中で遮られる。

「琳。野々瀬琳だ。……君が教えたくないのなら、自分で探すまで。機会があつたらまた会おう、繩田水流君」

野々瀬と名乗ったその女は、背を向けたまま手を振り、その場

を去つていった。

立ちつくしていた僕は、侮辱による怒りのため、フルネームで呼ばれたことに暫く気が付かなかつた。

アスファルトに響く自分の足音を聞きながら、僕は悶々と考え込んでいた。何を？ 決まっている、先ほどの女 野々瀬のことだ。何故あの女は僕の名前を知っていたのだろう？ 最初から僕が碧水の生徒だと知っていて、それで近付いたのか？ そうとしか考えられない。けれども僕は区域Cの外に知り合いなどいない。そもそも区域Cを出たことは一度しかない。その一度というのも二、四歳頃のこと。僕自身の記憶には殆ど残っていないのだ。

幼い頃、僕は心臓に障害を持つていたらしい。それで区域Cの外にある病院で手術を受けたのだ。勿論、設備の整った優秀な病院は区域Cの中に多くある。しかし、その僕が治療を受けた病院は、区域Cではできるだけ公表したくないワケありの、新しい術式を開拓していたそうだ。そして僕はその最新式の手術を受けることになつたのだ。こういうことは格段、珍しいことではない。企業秘密を守るために区域Cの外に支社を持つている会社 病院は会社ではないが、競争という点では似たようなものだ は少くない。もつとも、区域Cに本社すら置かないといつ、奇妙なことこの上ない会社もある。それがエデンカンパニーだ。だが、それは例外中の例外である。

とにかく、僕が区域Cの外に出たのは一度きりだ。もしかしたら、あの女はその時に病院に勤めていたスタッフだろうか。そう考えて、すぐに否定する。どう見てもあの女の年齢はは二十代前半だつた。十数年前に、医療スタッフとして働いているわけがない。仮に野々瀬がかなり若作りをしているとしても、当時三つか四つだった子供の顔を、今の僕と一致させられるわけがない。けれど、そうすると完全に行き詰ってしまう。あれは誰だ？

第一、碧水学園に何の用事があるというのだ。

不意に目の前に丸いボールが転々と転がってくる。その赤い体

を陽光に反射させて、それは僕の足許で止まつた。拾い上げると、日差しで暖められた表面がほんのりと、手に心地よかつた。

「あ、お兄ちゃん、お帰り！」

幼い、高く澄んだ声が耳を打つ。僕は振り返つた。

「さくら」

むつちりした滑らかな白い肌をした五、六歳ぐらいの少女が、僕の方に駆け寄つてくる。純粹な笑顔を惜しみなく向けるこいつは……妹だ。釣り田がちの僕に似ておらず、田尻の下がつた愛らしい顔をしている。悔しいが、可愛い。兄馬鹿と言われても構わない、とにかくこいつは可愛い。

「ただいま……ほらよ

僕は拾つたボールをさくらに渡した。

「ありがとう。さくらも一緒にお家帰る」

さくらは僕の隣に立つ。その様子が、本当にいじらしかつた。やや傾き始めた日差しが、道に大小一いつの影を作る。さくらはその影を見ながら飛び跳ねている。どうやら自分の影の頭を踏みたいらしい。

できるか、そんなこと

けれども彼女はその無駄な努力を実に楽しそうにやつていた。跳ねるさくらと、そのやや後ろを追つよつにして歩いていた僕は、ほどなくして家に帰り着いた。そして僕は、玄関先にある指の先ほどの四角い窓に、自らの日をあてた。すると、僕の虹彩を認識した機器が、ピッと電子音をさせ、ドアの鍵を外す。

「ただいま」

玄関に入った僕は、しかしそこで嘆息する羽目になつた。

靴置き場には、爪先の細い黒光りするゴルフボールが置かれていたのだ。馬鹿馬鹿しいぐらいに踵の高い作りのそれを、好んでよく履いている女を僕は一人知つていた。

「お帰り、氷流。ひりゅう音西ちゃんが来てるわよ」

母親が奥の部屋から予想通りの台詞を飛ばしてきて、どうと疲

労が滲み出る。ところが隣にいるさくらは、ぱっと田を輝かせて喜んだ。さくらはどういうわけか、その存在だけで僕を一気に疲れさせた張本人に、よく懐いているのだ。僕からしてみれば、こうやって何の連絡もなしに突然訪問してくること、迷惑かつ面倒この上ない女なのであるが。

さくらは一階にある僕の自室に向かって、階段を駆け上がる。対して僕の足は、まるで枷を嵌められているかのように動かし辛くなつた。一步一歩進むたびに、ずしりと心の錘が増えしていく。

部屋の自動スライド式の扉を開けると、果たしてそこには、やはりというべきか、一人の女が鼻歌を歌いながら、僕のベッドに寝こんで漫画を読んでいた。腰まで届く栗色の髪は、一つに結ばれている。彼女は僕の姿を認ると、片手を挙げた。

「水流、おつかえりー！」

「そこ、俺のベッド。そしてそれは俺の漫画。降りて、返してくれない？」

「いいじゃん、ケチ。それにあたしは、水流のお嫁さんになるんだもん！ 水流のベッドはあたしのものだし、水流の漫画もあたしのものよ」

「勝手に決めるな。退け、^と帰れ

凄んでみせると、音西は肩を疎めて、ベッドから降りる。

この迷惑極まりない女の名前は佐藤音西。^{さとうねむら} 僕のクラスメイトだ。
 菩^{そのか}華^かがいなくなつた辺りから、猛烈にアタックしてくるよつになつた。最初はそれほど悪い気もしなかつたが、そのあまりのしつこさにはつきり言つて、鬱陶しく感じるよつになつた。けれどもそれにも構わず、音西のアピールは増していく、ついには彼女宣言まするようになったのだ。面倒臭くて放置していた僕は、気が付いたらがつちりと外堀を固められ、いつの間にか僕と音西は交際しているということが公然の事実として知れ渡つてしまつことになつた。慌てて否定して、周囲の誤解を解こうとした時は既に遅し。単に僕が照れているだけだと、受け止められるのみだったのである。かくして、僕は音西の計略にまんまと嵌つたというわけだ。自分自身が情けない。

いつの日か、彼女が『恋愛』^{こい}に飽きてくれることを密かに期待しているわけだが、それは当分の間無理そうだつた。

「えー、音西姉ちゃん折角遊びに来てくれたのに、帰っちゃ嫌だよつ」

弱々しい服の抵抗を感じて視線を落とすと、さくらが裾を引っ張つていた。その濁りのない黒目^{こくめ}に、不服の色が浮かんでいる。こんなふうに妹の純然たる非難の眼差しを浴びると、僕はどうしていいのか分からなくなる。途端に自分がとても悪いことをしてくるような気になる。卑怯だ。

「んー、さくらちゃんがここまで言つのなら、あたしまだ帰らな^いい。」

僕はもう少しで舌打ちをすることだった。それをしなかつたのは、さくらがはしゃいだ声をあげたからだ。

「本当? やつたあー。」

「うとうと、お姉ちゃん、さくらちゃんのために必ずつとこ^ここ

てあげる」

僕のためにはひとつと帰つて欲しいのだが。

そのとき静かな振動音がして、扉が開いた。カタカタと音を立てながら入ってきたのは小型の青いロボットだ。半球状の頭には顔のパーツこそないが、周囲を認識するためのカメラが一つついている。頭の下に首はなく、円柱状の胴体がつき、その下にはローラーの脚がついていた。正式名称G-?型給仕機。一家に一台はあるお手伝い用ロボットだ。因みに、我が家では『Gさん 爺さん』の愛称で呼ばれている。実際、盆にお茶と菓子を載せて家の中をカタカタと歩いている姿は、勿論、本人が自主的に持っているのではなく、運ばされているだけなのであるが、まさに爺さんの呼び名が相応しい。そして今も、小さな丸い手で盆を支え、三人分のお茶と和菓子を用意していた。

「今日ノ オヤツハ 甘野屋ノ 葛餅デス」

爺さんが逍々しい語調で説明する。この渋いセレクトは間違いない母さんだ。

僕が盆を受け取ると、爺さんの両腕が胴体の中に引っ込んだ。

「わあ、嬉しい、甘野屋の和菓子大好きよー、じーちゃん、ありがとう」

音西が両手で爺さんの頭部を挟んで、その天辺に唇を軽くあてた。

当然、爺さんは顔を赤らめることもなく回れ右をして、無機質な音を立てながら帰つていく。どことなく愛嬌のあるその後姿を見送つていると、音西に声をかけられた。

「なーに、あたしがじーちゃんにキスしたから妬いてんの?」

「んなわけねーだろ、馬鹿」

「もう、図星なくせに!」

冷たくあしらつたにも関わらず、音西は興奮して僕の背部を力任せに叩いた。僕は危うく、盆を取り落としそうになる。すんでのところで堪えたが、茶は僅かに零れて盆の上で湯気の立つ水溜りを

作った。

僕は音西を睨んだが、彼女は全く応えた様子もなく、さつさと自分の分のお茶と皿を取り、皿の上に乗った葛餅を一つ口に放り込んだ。

普通、他人の幸せそうな顔は見ていてこっちも幸せになるものだが、こいつの場合は殺意を覚える。そしてそれは僕だけの責任ではないはずだ。

「で、何しにきたの？」

盆を机に置きざま、不機嫌も露わに尋ねると、音西は僕の方を一瞥した。

「実はね、一大ニユース持ってきたのー。それで氷流ひりゅうに教えてあげようと思って！」

ふうん、と無関心な返事をしたのは、音西の持つてくる『一大ニユース』というのが、大抵は下らないことばかりだからだ。例えば、野良猫がいなくなつたと心配していたら鈴木さんが引き取つていただとか、近所のスーパーのイケメン店員が実は友達の兄だつとか、等。せめて、近所の野良イケメンが鈴木さんに引き取られた、とかだつたらまだ面白いが、流石にそれはないだろ？

自分の鞄を引き寄せてデンペ 電子ペーパーのことだ を取り出した音西を尻目に見ながら、僕は葛餅を口に含んだ。じんわりとした甘味が口腔に染み渡るように広がり、同時に冷たさが上顎と舌を圧迫する。美味也、美味也。これならば、甘いものが苦手な人でも病みつきになることを保証できる。

「あつたあー！」

一いつ皿を口にした直後に、突然、音酉^{ねとり}が素つ頓狂な声を上げる。丸くて艶やかな葛餅は、その形態を留めたまま、僕の喉を通過して胃袋に落ちたようだつた。当然、味わう暇などありはしない。

「ここだよ、この記事！」

僕の悔しさを余所に、該当箇所を見つけたのを喜びながら、音酉はデンペを広げてみせる。

……やはりこいつの嬉しい顔は、頭にくる。

「胃の粘膜に味蕾はないんだけど」

「は？」

「何でもない。で、一大ニユースがどうしたつて？」

今度は野良犬と木下さんの話ではないだろうな。もしそうだつたら一発殴つてやる。女だらうと関係あるか。食べ物を粗末にする方が悪いのだ。

一方、音酉は人の気も知らず、デンペに細い指を滑らせていた。それに従つて画面が動く。やがて目的の記事がデンペの中央にいきついたらしく、指を止めると、今度は強く押した。すると小さな文字がはつきりと拡大される。

「ここ、ここ読んで！」

そういうつて、彼女が指し示した記事は、新聞とはまた違う、けれど雑誌と言つには些か地味なものだつた。目を眇めて、そしてその生地の隅に記されてある印字を見て、僕は驚く。

「お前、これどこで手に入ってきたんだよ」

小さな書体でそれは『エデンカンパニー』と記されていた。恐らく、これは社内誌だ。エデンカンパニーの社員でもなければ関係者でもない音酉が、手に入れられるものではない。

「うふふふふー、あたしの情報網を甘く見て貰つちや、困るのよ

ん。……それより、読んでつたら!」

音西は急かす。

まあ、社内誌とはいえ全く外部に流出しないものもあるまい。そう思い直すことにして、彼女が指定した箇所を、声に出して機械的に読み上げた。

「かむや しおん神谷紫苑社長」令嬢 そのが苑華さん、十五日急性心筋梗塞のため死去」

一瞬の間があった。その文字の羅列が、理解として胸に刻まれるのに時間がかかったのだ。そしてその一瞬が過ぎ去った後、僕は思わず声を上げていた。

「ええつ?」

不覚にも声が裏返つてしまつ。視界を上滑りしていく文字に、頭が追いつかず、僕は何度もその箇所を読み返した。

「苑華、死んじやつたんだってえ!」

人の死をまるでゴシップネタであるかのように、音西は跳ねるような口調で言つ。そこには、逝去した魂への惜しみの念や、悲しみの感情といったものは微塵も感じられなかつた。

音西にとつて、これは話のネタの一つにしか過ぎないのだ。

僕は隣から聞こえてくる、不快な軽やかさを奏でる声を、できるだけ耳に入れないようにしながらもう一度記事を読み返す。そして最後の一文まで目を通したとき、ようやく女堵の息を漏らすことができた。

「いこ、よく見てみる。やつぱりこの人はあの苑華じやねえ」

わざとぞんざいに吐き捨てて、デンペを音西に突き返す。だが、渡したその手がまだ小刻みに震えているのを止められなかつた。そして音西にそれを見られたことが、耐え難いほど屈辱だつた。同時にそういう状況を作つた彼女に、激しい憤りを感じてしまつ。

音西は戻つてきたデンペに顔を近づけて口を開いた。

「……享年、二十五歳。あるえ？」

多くの男を惹きつけるであろう、その滑舌の悪い口調と幼児性のある高めの声も、僕にとっては、癪に障るもの以外のなんでもない。

「年齢が違うだろうが、年齢が」

「え、でも苑華、神谷社長の養子になるって言ってたじゃん」

「あれはあいつの嘘、冗句。分かった？」

そうなのである。

苑華が引っ越していってから、僕はそれとなく彼女の友人達に近況を聞いてみたのだが、神谷社長の所に行つたという話は聞かなかつた。彼らは皆一様に、新しい学校で元気にやっているらしい、と答えたのみだつた。中には苑華からきたメールを見せようとしてくれた奴もいたが、女特有のカラフルな彩りを施されたそれを読む氣など到底なれず、結局、目を通さず仕舞いだ。

よくよく考えてみれば、確かにあの苑華と神谷社長との間にどんな接点があるというのだ。苑華はどちらかといえば、平凡な、これといって何の特徴もない女で、神谷社長のような有名人と繋がりがありそうな華もなかつた。

要するに、苑華は どこで仕入れてきた情報なのか知らないが 神谷社長の娘が自分と同じ名前であることに気づき、最後の大法螺を吹いていったわけだ。

単にこちらを驚かせて楽しんでいたのか、それとも僕が彼女の転校に関してあまりにも無関心だったために気を引こうとしたのか、その真意がどこにあつたのかは定かではない。

ただ、苑華が僕の前から去つていったという事実だけが残されている。

「なんだ、折角、大ニュースと思つて水流をびっくりさせてやるうと思つたのにい」

音西はテンペを片手でひらひらとそよがせる。

その軽薄な態度に、むつとするものが沸き上がるのを禁じ得ない。

「お前さ、誰かが死んだとかいう話を、そう簡単に持つてくるつて人としてどうなんだよ？ そしてそれ聞いて俺が喜ぶと思った？」剣呑な口調で迫つてみたが、音西は少しも応えた様子がない。両腕で自分の顔を庇つようにし、おどけたように笑うだけだった。

「やあだ、水流こわい！」めんつてばあ

全然悪いと思つていないのであろう謝罪だった。

ここまでくると怒りより脱力が先に立つ。こんな奴に本気で怒つても仕方がない。エネルギーの無駄というものだ。

こみ上げてくる嫌悪を無理矢理、押さえつけて、僕は音西から目を背ける。だが、一向に離れてくれない視線を感じて、つい、また振り返つてしまつた。

「……何だよ

怒りも露わに睨み付けてやつたが、音西は全く応えた様子もない。ただ、好奇心丸出しの瞳でこちらを眺めていただけだった。

「ふうん

彼女は、くすりと笑う。更に苛立ちが増した。

「何が『ふうん』だよ。お前、自分がやつてること分かつてんのか？」

「あたしは分かつてゐつもりよ。水流が苑華そのかのこと好きだつてことも」

本氣で、殴つてやるつかと思つた。いや、実際そうしていたか

もしけない、そこに柔らかな声さえ飛び込んでこなければ。

「ねーね、お兄ちゃん、絵本読んで」

ふんわりとした緩やかさで、嫌な場の空気を和ませてくれたのは、さくらだった。さくらはぱつくりと膨らんだ手に、小さなチップを乗せて僕の前に差し出していた。

その無垢な仕草を見て、眉間の緊張が解かれていくのが自分で分かる。

普通、弟や妹ができたとき、兄や姉というものは、家族の関心を全て搔つ攫つてしまふ彼らに對して嫉妬してしまうものだが、僕の場合はそれは当て嵌まらない。その不用意に抱けば壊れそうな華奢な体と、よく透る澄んだ声、そしてまだこの世界の穢れに染まつていなない魂が愛おしくて、親にも顔負けの勢いで可愛がつたものだ。

「はいよ」

僕はその紅葉もみじのような手からチップを受け取り、自分専用のデンペを取り出す。そして小指の爪の先ほどの端末にそれを差し込んだ。デンペの画面が一瞬にして変わり、淡い色彩の絵本の世界が広がる。

「つーまーんなあい」

音酉が口を尖らせる。彼女はすつと立ち上がった。

「もういい、折角、来たのに水流が取り合ってくれないから……」

僕が内心ガツツポーズをしたのは言つまでもない。はつきり言つてこの空氣の読めない女にはとつとと帰つて欲しかつた。

しかし、僕は次の音酉の台詞を聞いて、絶望に陥ることになる。

「トイレに行つてくる

覗いちや嫌よー、と軽口を叩きながら階下へ降りていく音酉に、

僕は思わず舌打ちをした。

けれど、怯えた表情で僕を見上げてくるさくらに氣づき、慌て笑顔を作る。そしてデンペに映し出された文字を読もうとして……そこで硬直してしまった。

突然、視界がぶれたのである。

同時に、外部から体を拘束する物凄い圧力を感じる。いや、外部ではない内部からくるものなのかもしれない。直接、神経が痛みを訴えるのではなく、何か触覚を感じるのではない。ただ身体がまるで自分のものではないように重くなつたのだ。麻痺をする、というのはこういう感覚のことをいうのかもしない。

疲れが溜まつていたとき、うつかり転寝した際に襲つてきたことのある金縛りを思い出す。自分の四肢どころか声帯すら動かすことができず、誰かに助けを求める事もできないあの恐怖。

今この感じはそれと似ていた。

そして、僕に訪れた異変はそれだけではなかつたのだ。

逃げなさい

聞き覚えのない少女の声が、脳内に滑り込んでくる。耳から入つてきたのではない、脳裏に直接響いたのだ。まだ幼さの残る、けれど纖細な輝きを魅せる玻璃を思わず、神経質な声。その声は、静かではあつたが、有無を言わせない、秘めた力強さを持っていた。幻聴かと思つたが、そうではなかつたらしい。

早く

声はもう一度、そう言つた。

身体が震えた。いや、硬直していたから、実際に震えとなつて表に出ることはなかつたが、そんな感覚が全身を走つた。

すう、と誰かが大きく息を吸うのを聞いた気がした。そして次の瞬間、僕の身体は束縛を解かれる。突然、自由になつた身体は平衡を崩し、僕はその場に倒れこんだ。

だが、倒れていののも一瞬のこと、意図せずにして手足が勝手に動き始める。

「ちょ、な、なんだよこれ！」

下手なダンスを踊つているかのよつた、不規則な動きはけれど

まつすぐ窓へ向かっていた。

「お兄ちゃん？」

さくらが不審げに僕を見ている。だが、僕はそれに答える余裕がない。あつたとしても、どう答えればいいのか分からなかつただうづ。

僕の身体は、二階の窓を乗り越えようとしていた。視界が大きく動き、庭の垣根、続いてコンクリートの地面を捉える。更に顔が無理矢理、上を仰がされた。そして、それだけには留まらず、左右を見渡す。何かを探しているかのようだ。けれど、僕自身は何かを探そうとしているわけではないのだ。

ややあつて、ぴたりと合わせられた視線の先には、張り巡らされたコードがあつた。

区域Cには様々なコードが繋がれている。それは勿論、家電を送るためのものであつたり、ネット上の情報を送るものであつたり、はたまた空調を精査するための探査機を通すためのものであつたりする。僕の目ははつきりとそれらを捉えていた。

R 5 8 3 B

「……R 5 8 3 B。……つて、えつ？」

先ほどの声の主が、訳の分からぬ英数字の羅列を呟いたかと思うと、どういうわけか僕の唇までがそれを鸚鵡おとつるのように繰り返していた。

ばちゃん、と何かが弾けるような音がしたのはその刹那のこと。

音の正体は上空に架けられた無数のコードだった。この都市を動かし、制御するために情報を流すそれらが、火花を散らしながら千切れ、風に煽られて舞つていた。だがすぐに、意思を持つ生き物であるかのように、不自然に動き始める。

はあ、と今度は誰かが深く大きく息を吐いた気配を感じる。その息の主が、さつきから脳裏で言葉を発しているものだと僕はこのとき疑つていなかつた。

そして次の瞬間には、体はコードに巻き取られ、そのまま宙に

放り上げられた。

視界が大きく動き、足の下の抵抗がなくなる。頬が風を切る感触が、こちらの不安を煽り立てる。窓の向こう側の、呆然とした表情のさくらが遠くなつた。それから、僕の体は真っ逆様に落下していった。

「う、うわああああ！」

無様な叫びが喉を迸る。

そして、不意に近くで強い風音がしたと思うと、鈍く強い衝撃が僕を襲つた。けれどそれは、墜落したための痛みではない。僕の身体の半分ぐらいの大きさの何かが、横から僕を受け止めたのだ。

角張つた生暖かい感触のそれは、ほんの少しの間だけ飛び、そして僕とともに地に叩きつけられた。低く重い不協音が周囲に響き渡る。

何が起きたか分からず、僕は暫し放心していた。頭を何度も振つても、目眩はなかなか治まつてくれそうにない。ただ、全身を支配する激痛が、これが現実であることを告げていた。

自分を攫つたその硬くて熱を持つそれに、改めて目をやつてみる。それが何であるか理解するのに、時間がかかつた。

その立方体は、無数のコードの尾を引いていた。無理矢理、引きちぎられたらしく、コードは無惨な中身を粗くさらけ出している。前面にはレンズが取り付けられていたが、それも鱗割っていた。

知つてはいる、これは監視カメラだ。街中にこういったものが取り付けられているのは別に珍しくもない。これが記録する映像は、防犯のためは勿論のこと、特殊な感知装置で大気を汚染する物質まで、視覚化する役目も担つてている。ただのカメラにしては大きすぎるのは、その内部に、コードの他に複数のプログラムや浄化装置、犯罪者を捕獲するための捕縛弾等が含まれているからだ。

だがこのカメラがそれらの機能を失つて死んでいるのは、傍目からも明らかだつた。

何者かがカメラを破壊し、そして僕が直接コンクリートに衝突するのを防ぐべく、飛ばしたのだ。

「一体何が……」

発する言葉さえも、もはや自分のものとは思えない。それぐらに、脳内が混乱で飽和されていた。

でも、その飽和状態すら打ち碎く、それとは比較にならない災厄が訪れるなんて、誰が想像できただろう。

本当に何がなんだか分からなかつた。

次の瞬間には、自失している僕のすぐ近くで、耳を劈く爆音が響き渡つたのである。

そして気付けば、身体は大きく吹き飛ばされていた。加えて、

先ほどとは違う種の苦痛が、容赦なく降りかかってくる。細かい砂塵が服を切り刻み、皮膚を裂いているのだ。更に、がんがんと脳天から響いてくる痛みがある。視界はやたらと眩しく感じて、まともに物を見る事すらできない。吹き飛ばされた時に、頭を打ったようだ。

その時、唐突に胃の腑を突き上げるような、強烈な不快感が襲つてきて、僕はその場に嘔吐した。喉の焼けつくような痛みは残つたものの、それでやつと心身が落ち着いてくる。相変わらず目はちかちかとしていたが、なんとかして現状を認識すべく、周囲を見渡す。

そこで、自分の目を疑つた。そして、先程から目に刺さる光が、頭を打つたためだけではないことも知つた。

目前に広がるのは、地獄の火炎。かえん嬉々とした叫びを上げながら、紅蓮の炎が舞い上がり、濁つた煙が巻局とくろを巻いている。

僕はその光景が理解できなかつた。いや、全身全靈で理解することを拒絶していた。

巨大な炎の壁が包んでいるもの それは紛れもなく僕の家だつたのだ。

「嘘だろ……」

震える呟きが唇から漏れる。そしてそれが合図であるかのように、全身が小刻みに笑いだした。

「嘘だろ！」

もう一度、今度は大声を張りあげてみる。その鱗割れた声は、僕の耳にしつかりと返ってきた。

異変を知つた近所の住人が、手に荷物を持って、慌てて外へ飛び出してくる。彼らは皆、蒼白な顔で僕の家を見つめ、言葉を失つていた。中には、「テロだ！」と誰に向けてでもなく喚いている奴もいた。

これは、現実なのだ。現実に今起こつていることなのだ。

でも、そんなことは信じられない。信じたくなかつた。

だつて、あの家の中にはまだ僕の家族がいるのに。母や幼い妹が取り残されているのに……！ そして、音西もまた、の中にいるのだ。

けれど、あの中にいて彼らがまだ無事であるとは、到底、考え辛かった。

窓の向こう側、僕の部屋で、外へ飛び出す僕を見つめていたさくらの無垢な瞳が、脳裏に浮かぶ。

同時に、何故、自分が家の外へ投げ出される羽目になつたか、その理由を悟つた。何者かが、こうなることを予測して僕を助けたのだ。けれど、どうして僕だけなんだ、と僕を操つた知らない誰かを激しく恨んだ。

「嘘だあーっ！」

そんな喉を裂くような悲鳴は、次の爆破音に搖き消されて、誰の耳にも届くことはなかった。

頭上に広がる空は果てしなく遠く、そして惜しみない清々しさを与えて、地上を覆っている。しかしその暑さのため、空気は淀んでいた。その中で蝉がじりじりと遠慮がちに鳴きながら、鬱陶しい夏の始まりを喜んでいる。

けれどこれは作られた自然。ここは区域 C 気候も環境もそこに生きる生命たちですら、人間に由つて作成されたプログラムで管理される、虚飾にまみれた落苑。

そして僕らは、その白々しい世界の中にいるのだ。
給水塔の作る影の上に仰向けに寝転がり、僕はそんなことを考えていた。

所詮、僕らの住まうこの地域は、作られた檻。嘘偽りの花を抱える、幻想の都市に過ぎない。

本当の現実は、もっと黒々として生々しく、そして残酷だ。生きていることすら困難に思えるほど凄惨で、それでも必死に生きようとする者たちを、いつも簡単に嘲笑うことができる。

きっとそれが現実なのだ。

僕は、今回の一件でそれを思い知らされた。

家が爆破されたあの事件は、結局、外部の人間によるテロによるものだとして片付けられた。もつとも、一番最初に疑いを持たれたのは、あの惨事の中、無事とはいからずも奇跡的に 本当にあれは奇跡としかいよいうがない。助かつた僕と音酉だったのだが。音酉はあの時、一階のトイレに行つていたために、異変を感じてすぐに外へ脱出することが可能だつた。けれども完全に災を免れることはできず、トイレの壁の下敷きになつたらしい。ところが不幸中の幸いにして、その壁自体が彼女の身を守る盾となつたということだった。

僕はといえば……あの時脳裏に響いた声、そして僕ではない何者

かによつて操られた身体のおかげで助かつたのだが、それを必死に説明しても誰も信じてはくれなかつた。当たり前の話だ。そんな非現実的なことを誰が信じてはくれなかつた。当たつたのだ。まともに誰かに分かつて貰おうとした僕の方が馬鹿だつたのだ。しまいには精神科医たちに診察されたあげく、あまりにも悲劇的すぎる災難に直面したため、頭が混乱して虚偽の記憶を作つてしまつたのだろう、ということにされてしまつた。

そして僕自身も、あの一連の出来事が、実は全部夢だつたのではなかろうかと、次第にそう思うようになつていつた。周囲の人間の言うとおり、自分で作りだした偽りの記憶なのだと。改めて振り返つてみれば、有り得ないことだらけだ。知らない人間の声が聞こえて、身体が勝手に動くなど、どうしてそんなことを思いこんでしまつたのだろう。端からみれば、異常ととられるのが当然だ。現実離れしたその体験を、思い返すのも馬鹿馬鹿しくなつてしまつた。

ところで、母とさくらはどうなつたか？ 言いつまでもない。あの地獄の中にいて命があるはずもなかつた。三年前に父を亡くしていだ僕は、こうして晴れて孤児となつたわけだ。

民家爆破事件は、事件後数日の間こそ紙面を賑わしたもの、ある程度ネタが尽きたところで、言及されることすらなくなつてしまつた。

それもそうだ。僕にとつての惨劇は他人にとつての物語でしかない。飽きたらもう読まれない、ただそれだけのこと。

そして都市は一月もすれば、何事もなかつたかのように動き始めた。

酷薄な現実を内包したまま、上辺だけの取り繕いを完璧にした都市の中で、人々はまた普段の生活に戻り、笑い合う。

だけど、僕だけがそれに取り残されていた。

悲しいとか、苦しいとか、悔しいとか、そういう感情はもはやない。そんなものは全て通り越してはいた。自分の許容量を遙かに超える絶望に面したとき、人はそれを認識するのを放棄するということを、

僕は始めて知った。

実感というものが、まるでなかつた。全てが夢の出来事のようこ
感じていた。

僕の家とそこに住む家族は、今もどこかで生活を営んでいる、ど
うしてもそんなふうに感じてしまうのだ。たとえば、店でお菓子を
見つけたとき。さくらに買ってやろう、といつててしまう。夕方
になれば、母親が今日はどんな夕食を用意しているのだろう、と想
像してしまう。そして、その次の瞬間に、帰る家も自分を待つ家族
も既にいないという現実を思い出し、絶対零度の絶望に襲われる。

僕は寝返りをうつた。できるだけ、身体を大きく動かさないよう
に努力したつもりだったが、事故で負った傷が痛みを訴え、四肢は
軋んだ。

思わず、顔が歪む。その痛みを振り払い、そして油断すれば胸内を支配しようとする痛嘆を追い払い、僕は思考に没頭することを選んだ。少なくとも、そうしていれば、取り乱すことはない。まだ精神の安定を保つことができる。

そうすると今度は、胸に大きな風穴を開けられたような心地がした。そしてそれが返つて冷え冷えと、僕の思考を冷静にさせていた。だから、当事者でありながら、まるで他人事のように分析してしまった。あの事件のことを。

もしあれが外部テロだったとして、一体、犯人は何故、敢えて僕の家を狙つたのだろう。心当たりなどあるはずもない。僕の家族は区域Cの外で生活したことなどないのだから、恨みを買うこともないはずだ。ただ、研究員だった父親だけがたまにCの外に出ることもあったようだが、その親父も三年前に、研究室の事故で死んだ。仮に、父が外部に出た際に何か憎まれることをしたとしても、そんな数年前のできごとで我が家を爆破することなどあり得るだろうか？ 親父がもういなくなつた我が家を敢えて？

一つ気になることと言えば、あの日、昼間に会つた野々瀬琳ののせりんとかいう女だ。あの女は僕が通う碧水学園を探していた。そしてどういうわけか、僕の名前も知つていた。

外部テロとであるのならば、あの女しか考えられない。そう、あの時、確かにあの女は火薬の異臭を漂わせていた。

けれども何故？ どうしてうちの家が犠牲にならねばならなかつたのか？

区域Cの外 それは政府の目が行き届かない、無法地帯。最低限それ以下の生活を強いられた、犯罪と貧困と病苦が蔓延する世界。だから中には、区域Cで平和に暮らす僕たちを快く思つていない輩も少なくはない。だからか？ 安穏と生きる者たちが許せないから、

苦難を知らぬ者たちが許せないから、その腹いせのためにやつたのか？ だとしたら、それは単なる逆恨みだ。

僕の家族が区域^{くい}以外の地域を、荒廃させたのではない。それは昔からだ。

僕の家族が怠慢のままに、ただ平安を貪っていたのではない。こちらだつて真剣に働き、勉学に励み、その報酬として今的生活があるのだから。犯罪に手を染めたわけでも、誰かを陥れたわけでもない、ただ平和に暮らしていただけなのに。それなのに……。

心の奥底に沈んでいたはずの怒りが、ふつふつと沸き上がる。よく研いだ刃で、全身を一気に切り裂かれたような疼きを錯覚する。そしてその疼きが、これが夢ではなく紛れもない現実であることを、また僕に思い出させるのだ。

知らず、爪が皮膚に食い込むほど、拳を硬く握りしめていた。その痛みにはつとして手を開く。掌には赤い筋がいくつかできていた。

「水流^{ひりゅう}……」

不意に、か細い声が耳に流れ込んできて、僕はそちらを振り返った。上空から降つてくる光を栗色の髪の上で反射させながら、ゆっくりと僕の方に近づいてくるその女は、音西^{ねとう}だった。

予想外の訪問者に、僕は目を丸くする。

「お前、ここ屋上だぞ。その足でどうやつて……」

「水流のことが心配だつたから、あたし、ちょっと頑張つちゃつた」
てへへ、と崩したその笑顔は、どこか無理があつた。

かこん、かこん、と彼女が動くたびに、その細い体を支える松葉杖が音を立てる。右足の脛から下をギブスで固定し、傷一つなかつたばずの頬をガーゼで覆つたその姿は痛々しかつた。命こそ助かつたものの、彼女の身体には確実に災厄の跡が刻まれていた。見ていられなくなつて、思わず顔を背ける。けれど、その気配だけは少しづつ迫つてきていた。

「水流……ねえ」

もう一度声をかけられて、また彼女の方に顔を向ける。想像して

いたよりも近くに音西の顔があつて、僕は一瞬、身を竦ませた。

「次、体育だよ、分かつてるでしょ。みんな探してたよ……」

台詞の内容こそ詰るものだつたが、その口調は責めるものではなかつた。責めるものではないけれど、だからこそまた別の痛みが僕を覆う。

「いいんだよ

「そつか……」

音西はそれ以上、詰め寄つてこようとはしなかつた。だが、その場から離れようともしない。

重い沈黙が、二人の間に落ちる。でも、僕も音西もお互いに何を言えбаいいのか分からなかつたし、何を言つても全てを伝えられる気なんてしなかつた。

音西も確かにあの事件の被害者だ。狙われたのは僕の家族なのに、全くの部外者でありながら、ただ運悪く遊びにきていたというだけで、巻き込まれた。だから僕は彼女に対して申し訳ないと思つている。

でも。

悪いのは僕ではない。僕が彼女を意図的に害したわけではない。それなのに、何故、僕が彼女に負い目を感じなければいけないのか。どうしてこんな理不尽な目に遭わなければいけないのか。

僕はその苛立ちから逃げ出せずにいた。

そしてそんな口を心底、醜いと思つた。

優しくそよぎゆく風が髪を揺らす。ふと、下に広がる校庭から、
賑わう声が本当に小さく響いてきた。ここまで聞こえてくるということは、かなりの大音量で騒いでいるのだろう。しかしここは、十
階建て校舎のその屋上。彼らの騒ぎ声は幸か不幸か、微かにしか聞
こえなかつた。怒つているのだろうか、笑つているのだろうか、悔
しがつているのだろうか、喜んでいるのだろうか。そんな様々な
声が混ざり合ひ、意味のない騒音として流れている。

忌々しいほどに平和だった。あの中の誰が、この僕の気持ちを理解
できるだろう。

ただただ平凡な日常をそのままに楽しむ彼らが、憎らしかつた。
何故ならもう僕はきっとそこには戻れないのだから。

が、その暗い思考がそれ以上、連鎖されることはなかつた。突然、
奇妙な音が鳴つたのだ。

その著しく場違いな音は、かなり近く　いや、僕自身から発せ
られていた。

きゅうーぐるぐるぐる。

僕は腹を反射的に押される。すると同時に、痛めていた四肢が悲
鳴を上げた。

「あ、いって、くわくわー。」

腹を押さえているのか、腕を押さえているのか分からぬ、奇妙
な格好で僕はその場で蠢く。するとまた、傷の痛みと腹の虫が同時に
口主張をしてくれて、そのまま動けなくなってしまった。

「くわ、くわー。」

隣で音西が吹き出す。長い髪が小刻みに震える肩と一緒に振動していた。

「……あんだよ」

寝転がつたまま睨め付けてみたが、全然様になつていらないだろうことは、我が事ながら重々、承知だ。

「だつて、氷流つたら……おかしいっ！」

音西はまだ笑い声を上げている。その表情は、さつきの作り物めいたものとはまるで違つていた。

「あー、もう！」

僕は痛みを無視して勢いよく起きあがる。そして服に付いた砂埃を軽く払つた。

「教室からパン取つてくる」

憮然として言い放つと、ぐるりと踵を返す。

「あ、待つて氷流、あたしもついてく！」

「お前のその足だと、倍時間がかかる。いい、すぐ戻つてくるし」

追つてきた音西の声を後ろ手で払い、僕は屋上の出口に向かって歩き出した。

どんなに暗い気分でも、どん底にいても、体だけは正直に空腹を訴えてくる。いつそのこと飢えて死んでしまえばいいのに、どうやらそれもできそうになかった。

自分の肉体さえ思い通りにならないことも、もどかしさを覚えながら、それでも僕はそれに逆らうことなく階段を降りて廊下を進み、そして教室の扉を開けた。

教室内には脱ぎ散らかされた衣服が散乱し、その上を窓から差し込んできた真夏の陽光が踊つている。誰もいないのにざわめきが聞こえてくるような錯覚をしそうになる場所。教室　何人もの生徒が笑い、泣き、はしゃぎ、勉強し、眠り、その全てを包み閉じこめてきたところ。そして僕も今までそこの一員だつた。

それなのに、あの事件の後　何かが変わつてしまつた。そこにある安寧はこんなにも脆く崩れやすいものだということをつきつけ

られた。以来、今まで見えていたはずの全てのものが変わってしまった。

分からなくなつて、しまつたのだ。

例えば今いる教室といつ場所も、もはや僕との間に薄い膜を作つてしまつてゐる。薄いのだけれど、もつて一度と破ることのできない、強靭な膜。

僕は今、一体どこにいるのだろう?

疑いもしなかつた幸福と安寧は、はつぱてでしかなかつたのか。本当の現実は、ただひたすらに生きるに辛いものでしかなかつたのか。

僕は今まで、一体何を見ていたのだろう? そして今見えている世界は何なのだろう?

ねえ、ひりゅう水流君、しらほし白星さんは君がとても心配です。君のつけていいるコンタクトは何色ですか? ちゃんと透明ですか?

突然、そのか苑華の台詞が脳裏に蘇つてきて、僕は身を強ばらせた。あれはいつの時の何の会話だった?

僕は机の間を縫うように進み、自分の机の横に下がつている鞄を開けた。荷物で圧迫されて若干、変形したパンを取り、それを包む透明の袋を引っ張る。ペリ、と微かな音がして、袋が破れた。そしてその瞬間、思い出した。

ああ、あれはそうだった、僕がパッケージを読み間違えて、ツナではなく嫌いなチーズパンを買ってしまつた時だ。ツナとチーズ。全然文字の形も違うのに、どこでどう間違えるんだ、という話になつたんだっけ。多分、あれは文字のデザインが悪かつたんだと思う。水流君、よく見えてないんじゃないの? コンタクト汚れてない?

あの時、苑華は笑いながらそう言った。だから僕は、大丈夫、汚
れてないし、と 実は前夜つけっぱなしで寝ていて、朝起きてか
らそのまま使っていたため、内心、ぎくりとしていた
あれは、その後の台詞だ。

ねえ、水流君、白星さんは君がとても心配です。君のつけて
いるコンタクトは何色ですか？ ちゃんと透明ですか？
うるさいな、だから汚れてないつて言つてるだろ
それならいいや。これからもずっと汚れないといいね。気をつ
けなきや駄目だよ

変な奴

何でいきなりあいつのこと思い出したんだか。

僕はパンを口に含んだ。否、含もうとした。

途中でやめたのは、変なものが視界に映つたからだ。

何だ？

それは、銀糸のようなものだった。無数の細い糸が、煌めきながら窓の外で舞つていた。

窓の蒼穹を背景にして、ペンキが少ししかついていな刷毛^{はけ}で、すうと描いたような細い線。その一本一本は幻想的に輝き、まるで異世界にいるような気にさせる。

だがそれは僅かな間のこと。銀の糸の群れはすぐに落下して窓の額縁の外へいく。

幻だったのだろうか、と思つたのも束の間、ところがまたそれはふわりと、舞い上がっててきた。今度はもっと長く、もっと多く。窓の蒼さを払拭して銀糸の占める面積が広がつていく。

一、二回それが繰り返されたとき、僕は手に持つていたパンを取り落としていた。

その銀糸の中に、顔があつたのだ。白く小さなそれは、はつきりと僕の瞼裏^{まなぶり}に焼き付いた。そして気付く、僕が糸だと思つていたものは、顔の主の髪だったのだ、と。

喉の奥に悲鳴を飲み込む。いや、正しくは喉が閉まつて叫び声す

ら出なかつたのだ。

また消えた銀髪と顔は、すぐにまた浮かび上がる、今度は上半身を伴つて。そしてその次に上がってきた時には、余すことなく小柄な全身を現していた。

そのままその者は、ふわりと軽やかに、ベランダの壇の上に飛び乗つた。

その拍子に舞い散る銀色の髪。その中で陶磁器のように白く浮かび上るのは、整った少女の顔。十一、二歳といつたところだろうか。丸みを帯びた輪郭が、まだ幼さを残している。そして、その顔に嵌められた赤い瞳は、鋭利な刃物の印象を抱かせるほど冷たく澄んでいて、真つ直ぐ僕を捕らえていた。

それは確かに、ここを見ているのかもしれないけれど、でも見えている世界は他の人間とは全く違うように映つているのかもしれない。そう感じさせる目だった。

蛇の目だ……。何故かその時そう思った。

これは夢だ、と自分に言い聞かせる。教室の他に研究室等の多大な設備を備えるこの学園は、学校というには規模が大きく十階建てで、ここはその九階なのだ。それなのに、ここまで高さに人が飛び上がつてくることなど、できるはずがない。

僕はその場に凍り付いたように動けなくなる。

少女は無言で手を上に挙げ、そしてそれをまた下げた。華奢な指がゆつくりと弧を描き、一度、窓を上から下になぞるような形になる。

異変が生じたのはその直後のことだった。いや、その直前に、ぶうんと空間が振動した気がした。

それからザーンと荒い砂利を、それも大量に振り鳴らしたような音が響き、そして僕と少女を隔てていた一枚の窓が全壊した。

粉々に砕けた窓が、桟に収まつていたのはほんの一瞬。一瞬の後には、窓であったものは、粗い音を立てて砂のよう崩れ落ちる。尖った光を放つ小さな硝子の欠片が、光の山を作つた。

校内の警報がけたましく鳴り始める。けれどそれでも僕は我に返ることなく呆然としていて、逃げるという選択肢すら思いつかなかつた。また、田の前の少女もその整つた眉をぴくりとも動かさうともしなかつた。

少女はただ黙つて、手を今度は僕に向かつて差し出す。次に淡い桃色の唇を、初めて動かした。

「N.O.・03 あなたを迎えてきたわ」

触れば壊れてしまいそうな硝子細工を連想させる 周囲に緊迫を強いる声。聞き覚えが、あつた。それもそう遠くない過去に。記憶にはすぐに辿り着く。そう、あの事件の時、僕に逃げるよう指示したときの謎の声と、この声は一致していた。

警報は変わらず鳴つている。

「私と一緒に来なさい、死にたくないければ」

僕は唖然とする。彼女の言つている意味が分からなかつた。

「何で、俺が死ぬんだよ……。お前、誰だ？」

喉はからからに渴いていた。少女はそんな僕を冷めた目で見据える。冷たいけれど強烈な意思を奥に隠した、その瞳。

「来なさい、苑華を助けたければ」

その台詞に混じつた名に、僕の中の何かが反応した。

苑華 その懐かしい名。何度も忘れようとしたけれど、忘れられなかつた名。僕にとつて、後悔と甘い痛みそのものである名。目の前の少女は「助けたければ」と言つた。助けるとは、どういふことか。何か危険な目に遭つているということなのか。

つい、この間 そう、忌まわしい事件があつたあの田 音西 ねじり が苑華の話をしたばかりだ。結局は、彼女の指す『苑華』は、僕の知つている『苑華』とは別人だつたのだけれど。

しかし、またその名が出てくる。この時期に、このタイミングで。これは果たして偶然なのか。

全く理解ができない。自分の前に起きている事態を、飲み込むことができない。

でも、少女は何も説明しようとはしなかつた。彼女の真紅の双眸さつまなまなこが、避けることなく僕に向けられている。差し出された可憐な手は、強制的に僕の手を握ろうとはしない。ただ、待つている。

胸の鼓動が速まつた。上手く息が吸えない。上半身を締め付けられるような緊張が襲う。

苑華そのか、死んじゃつたんだってえ！

頭の中で、音酉ねどりの明るい声が響いた。

同時に、僕の中で何かが弾ける。

少女の手はまだ僕の前にあつた。

指先が震える。何か見えない『いと』で引っ張られるように、僕の腕が拳がる。でもそれは僕自身の糸。直感によつて導き出された意図。

後に少女 天井野薔薇あまいのばら はこう語る。あなたが来てくれるか確信はなかつたし、説明している暇も無かつた、けれど前にしたように無理矢理、体を動かすことはしたくなかった、あなたに選ばせたかつた、と……。

持ち上げていた腕を、ゆっくりと降ろす。それは短い間のできごとだつたのかもしれない。けれど僕には大層長いことのように感じられた。長い時間をかけて、やつと少女の掌に自分のそれを重ねたように思った。

僕自身も振り返るに何故、あの選択をしたのか分からなかつた。

でも、僕はその手を取ったのだ。僕の中の何かが、そうじりと、告げていた。

そして僕はそれをきっかけに、本当の意味で、今まで過ごしてきた平凡な日常に別れを告げることになるのだ。

「誰だ！ そこで何をしている！」

異変を知った警備員が数人、銃を手に教室に飛び込んでくる。「すぐにその場から離れろ！ 何だお前はっ？」

「エデン」

少女は短く答えると、存外に強い力で僕を引っ張る。そして彼女はなんと、そのまま窓から飛び降りた。つまり一人は、九階から落下する形になつたわけである。

たまらなかつた。本当に、たまつたものではなかつたのだ。

「ちょおつと待てえええええええ！」

情けない悲鳴が僕の喉から飛び出る。これは僕がチキンだつたらではなく、当然の反応なのだ。今まで どうやってかは知らないが 飛び上がってきたこの少女ならいざ知らず、僕は空を飛ぶ術など心得ていない。

そうこつしている間にも、顔に体にもりに吹き付ける風の速度は激しくなつていく。それは加速度的に、落下スピードが増しているということだ。どんどん地面が近づいてきて、もう駄目かと あともう少しで意識を手放してしまうほどの 恐怖に駆られたとき、強い衝撃がきて落下が止まつた。

「ナーリスキヤツチ。やっぱ俺天才やわ」

バリバリと不快な機械音と共に、その場に似つかわしくない脳天気な声が頭上から降つてくる。僕と少女の体は頑丈な革で作られた太いベルトのようなもので、巻き取られていた。ベルトは今度は上に巻き上げられ、なにやら大きな鉄の固まりの側まで寄せられる。それが小型航空機の機体であると気づくのに、数秒かかった。

「ほれほれ、上がりや。さつさとせんかい！」

機体の上に立つたゴーグルの男が、手招きをして急かす。

少女は「どうぞベルトを腰に巻き付けたまま、慣れた仕草で乗り込んではいた。

何が何だか分からぬままに、必死で上がるうとするものの、上手く行かない。当たり前だ、この小型機はもの凄い速度で飛んでいるのである。上がるより先にどこかに引っかかつて体の一部が飛んでいきそうな勢いだつた。

「急がんかい！ 足が吹っ飛んでまうで？」

男はこちらが今、脅威に感じたことをそのまま口にする。僕の方だつて急ぎたいのは山々だが、そのためには若干、スピードを落として貰いたいものだつた。男に助けられもがきながら何とか上る。その刹那、がくんと機体が大きく揺れた。

「ちくしょう！ 一発当てられた！」

品のない怒声が上がる方に目をやれば、ヘルメットを被つた女が、操縦席で拳を叩きつけていたところだつた。女、と思つたのはその声からだ。……そして、その声にも聞き覚えがあつた。

「ああ、琳さん、俺のアネーちゃんをそない殴らんでえな！ 益々、傷付いてしまうやないかあ」

「雷、操縦代われ！ こんなのに四人も乗つてるから速度が出ないんだ。二手に分かれて巻くぞ」

こんなつて、一応五人乗りやのに……とぶつぶつ文句を言いながら、ゴーグルの男　雷と呼ばれた男が渋々操縦席に座る。一方、ヘルメットの女は機体の側面に付いていた更に小さな小型機に乗り込み、本機からそれを外した。「おん、と間近で大音量を発しながら、女の乗つた機体は小さくなつていぐ。そしてそれを複数の別の航空機が追つていつた。恐らく追つていつた方は、学園側のものだ。しかし、まだ僕たちが乗つている方の機体を追つものもいくつかあつた。

つまりのところ、僕はこの不審者らと共に、碧水から脱出しようとしているのだ。

それを把握した瞬間、後悔の波が押し寄せてくる。

「おい、降ろせよ！」

航空機の上で立ち上がろうとするが、揺れる機体に耐えられず、すぐに足を取られて転ぶ。すると、罵声が飛んできた。

「あんた、アホちゃうか！ 危ないやうが！」

そんなことを言われても、このようになつたのは、全部こいつらのせいではないのか。

きつくなんでやつたが、ゴーグル男は操縦に夢中で、そんな僕の視線に気付いた様子もない。一方、銀髪の少女は顔を巡らせ、追つてくる航空機を検分するように見ていた。そして、小さく咳く。

「？」

すると僕たちを追つていた方の航空機のうちの一隻が、急に上空へと方向転換した。そしてそのまま、僕たちから離れて、遠くに飛んでいってしまう。

「？」

続いてもう一機が、今度は反対方向に急激に向きを変えた。次いでこちらも、僕たちから離れていった。

僕は言葉を失う。

何だこれは？ この少女が操作しているのか？

了解可能な範疇を超える出来事ばかりで、頭が混乱してくる。これは本当に現実に今、起きていることなのだろうか。実は全部夢なのではなかろうか。

けれど、肌で感じる強い風の感触、ベルトで巻き取られたときどこか痛めたらしい四肢の痛みは、本物だった。

絶句している僕を余所に、ゴーグル男が少女に声をかける。

「あんまり無理すんな、野薔薇。^{のばら}お前、波力使^{エダイン}いすぎや」

「……もうそんなに使わない。向こうが気付いて、回路を切られた
ら、それで終わりだもの。だからそれまでに巻いて」

そして僕が一人の声を聞いたのは、これが最後だった。少女の台
詞の直後、また別の衝撃が 今度は僕の近くに きて、今度こ
そ本当に意識を手放してしまったからだ。

次に目が覚めた時は天国か、それとも地獄か。それは、僕には知
る由もなかつた。

僕はいつたいどうなったんだっけ？

まるで自分のものではないかのように、意識と体が重い。動かそうと力を入れても、筋肉が収縮する気配すらなかつた。立つているのか寝ているのか、そもそも地についているのか、空中を浮遊しているのか、水中を漂っているのかさえ分からぬ。

曖昧なままの空間に取り残されている。

意識が？ 体が？

それすらも判然としなかつた。

油断するとそのまま、どこまでも深く深く沈んでいきそうな思考を、必死に繋ぎ止める。

僕はいつたいどうなつてしまつたんだ？

刹那、光が差し込んだような気がした。可視的なものではない、理解という名の、閃光。

脳裏に、眩い銀光と鮮やかな血の色が蘇る。それを兼ね備えていたのは、一人の少女。冷たい光を瞳に宿しながら、まっすぐにこちらを見据えていた。

あなたを迎えてきたわ

少女が神経質な声を出す。差し出された白い手を視た気がした。そう、あの銀髪で赤い瞳をした少女の言われるがままに、学校を飛び出し、そして……そうだ、そして乗り込んだ小型航空機の上で、僕は撃たれたのだ。

僕は死んだのか？ そつかもしれない。きっとここには生きている人間が楽園と呼ぶ場所。

ほら、樂園なんてそんなもの存在しないというのが分かるじゃな

いか。ここには花畠もないし、鳥一匹飛んでいやしない。それどころか何もない。

苑華、やっぱり僕が言ったことが正しかったんじゃないか。死んだら何もない。そこに残るのは。

ねえ、人は死んだらどこに行くのかな？

唐突に、よく透る声がぼんやりとした僕の心に入り込んできた。途端に拓ける視界。

瞼は思ったよりもずっと軽くて、ただ容赦なく差してくる燐然とした陽光がひたすら眩しくて、僕は腕で目の上に影を作った。上空には雲一つ無い青空が、どこまでも広がっている。

無限で夢幻の夏のイメージ。苑華そのがに通じるイメージ。

苑華はあんなにも儚い印象を持っていたのに、あいつを思い出すときはいつも夏だ。

死んだら、何も残らねえよ。全部、消えるの。無だよ、無僕は道端に転がっていた小石を、意味もなく蹴つ飛ばした。

うーん、何かそれって寂しいな

別に寂しかないし。それって当たり前のことだから。それに

俺はこう思うわけ。死んだら焼かれるだろ？ 焼いた煙は分子になつて、散つて自然に還るわけ。これもある意味輪廻だろ

何となく、普段から考えていたことを真面目に答えてしまった。

苑華が横で、ふふと笑う。

成る程。水流君は哲学的だね

は？ どこが哲学的なんだよ

ごめん、適当に言つただけ

相変わらず訳分かんない奴だな。……で、お前はどう思つわけ？ 楽園があるって信じてるの？ 或いは輪廻転生とか？

女子学生が期待してそうな回答を、半分馬鹿にしながら言つてみ

る。

けれど、苑華は別に気分を害したふうもなく、腕を後ろに組んで、大空を仰いだ。そして目を閉じる。長い睫毛が、きめ細かい肌に影を作るのを、僕はなんとはなしに見ていた。

私はね、天国つてのはあると思うよ

へえ

白けてしまつて興味のない返事で流そうとしたのに、彼女は続けた。

どこにあるのかなんて分からぬ。本当にあるのかなんて知らない

でもお前、今、あるつて言つただろ。ほんつと訳分かんねえ奴苑華は柔らかな微笑を浮かべて、僕を見た。

敵意も害意もないはずのその表情に、逆に僕は戸惑つ。

何故だろう、負けた氣がする。けれどその負けが決して不快ではないのだ。むしろ居心地が良すぎて、居場所が分からなくなる。そんな感覚。

だけど、あるんだよ

今度は苑華は断定的に言つた。

だつてそれは願いだもの

何だよ、それ

掴み所のないその少女は、ふと脣で邪氣のある三日月を描いた。

じゃあね、氷流君、もし私が死んだら、君はどう思う？

あれ？ あの後、僕は何て答えたつけ？

青い空が、急に後退していく。

今いる場所ではない別世界が、無理矢理割つて入つてくる気配がする。

これは覚醒の兆候。目が覚めたときは天国か？ それとも地獄か？

あいつらに会つ 否、遭うことになつたんだから、地獄だよな。
後に僕はそう言つようになる。でも、虚飾の天国ではない、気持ち
がいいほど逞しく力強い地獄なんだから、ずっとといひ、と。
扉はもう、すぐそこ、だつた。

「琳さんやなかつたら、誰が俺のカレーパン食つたんや！」

覚醒は唐突に訪れさせられた。独特の訛のある怒声によつて。なんだ？

目を開こうとするが、これがなかなか上手くいかない。瞼の裏が眼球に貼り付いたように、小さな痛みを訴える。それでも思い切つて開けると、視界に今、自分がいる環境が映し出された。

真っ先に目に映つたのは、灰色の壁だ。薄汚れていて、何のものか分からぬ染みがいたるところにこびり付いてる。それで、僕は自分がどこかの部屋にいるらしい、ということが分かつた。室内にある明かりは、天井から下がる電球が一つばかり。部屋全体を照らし出すには、その明かりは乏しすぎて、壁際は闇に落ちている。そして僕は、その暗がりの中に横たわつていた。

こんな明かりすら満足にない、かつ手入れも行き届いていないような部屋など、異質以外のなんでもない。深夜であつても本や漫画を読むに困らない蛍光灯、よく掃除された床、白い壁。僕がこれまで、当然のように暮らしていた環境とは程遠かつた。

「知らんものは知らん！ どうせお前、自分で食べて忘れたんだろうが！」

不意に、女の怒鳴り声が耳を打つ。乱暴な声を張り上げているのは、艶のある黒髪の女だつた。勝ち気そうな瞳が、目前に立つ茶髪の男をきつく睨んでいる。

この女、見覚えがある。

そう、僕の家が爆破された事件のあつた日、碧水学園への道のりを聞いてきた女に違ひなかつた。いや、その後にも一回、会つた。学校から脱出する羽目になつたとき、航空機を操縦していたのが確か、この女だつた。女にしてはえらく乱暴な口調と、低い声音が強烈に記憶に刻み込まれてゐる。

「いいや、食つてない。絶対食つてない！ 第一、食つとつたら、こないに腹減つてへんわ！」

そしてこの詫男にも覚えがあった。正確にはその詫口調に、だ。といつのも、会つたときは男は「ゴーグルをしていて、顔を把握できていなかつたからだ。今、こいつやつて見てみると 怒つてはいるのだろうが、一重で細めの目と、若干下がり氣味の眉がなんとなく剽輕な印象を付与してゐる。年齢は僕より少し上 十八、十九といったところかもしれない。

そして、激しい火花を散らす一人から少し離れて、人形のように綺麗な容姿をした少女が、溜息を吐くでもなく呆れるでもなく、まるで無関心にその白髪を、櫛で梳いていた。

一体、何なんだこゝは。こゝが天国といつのなら、大層騒々しい天国だ。

力を入れて身を起こそうとしたが、全身に痛みが走つて、痙攣するようにしか動けない。信じられないぐらい時間をかけて、上半身だけ起こすのがやつとだつた。そこでやつと、僕は腕やら足やらの、恐らく擦り傷を負つたところにガーゼが巻かれ、数カ所に湿布が貼られてゐることに気付いた。恐らく、その湿布の下は青黒く変色しているのだろう。鈍い痛みをしきりに訴えている。どうやら氣を失つてゐる間に、手当てをしてくれたらしく。

だけど、こいつらは一体何なんだ？

僕が訝しがる間にも、詫男と乱暴女は相変わらず口論を続けてゐる。

「お前がどれだけ腹減つてよつと、私の知つたことか！ 食つより働け！」

「何やと！ 働いとるやないか！ あの小型機も武器も通信機も誰が作つたと思うてんのやつ？」

「あー、そうさお前が作つたんだ！ だがな、それに積んであるプログラムを組んだのは、他でもないこの私だ！ そして組み立てたのがお前だ。だからほんの五、六発当たられるぐらいで使い物にな

らなくなるほど の 檻 補 なわけさ！」

「 檻 補 て、俺のアネーちゃんを 檻 補 て！ もつ 今日 といつ 今日は 許 さへん で！ そもそも ぶつ 壊れた はんは、あんたの 操縦 が どんくそ う て、あいつらに 簡単 に 撃たれた せい やろ！」

「 何だと！ 貴様 だつて 人のこと 言えんぐらい、いや、私 以上 にく らつて たじや ない か！」

一人の議論は更に白熱していくばかり。まつたく、カレー・パン・ご ときでよくもまあ、こんなにも本気に嘸み合えるものだ。もつとも、 内容は本題からだいぶズレてきてはいるが。

僕は少女の方にそろそろと視線を戻してみる。彼女は、さつきか ら我関せずとばかりに、黙々と整髪に勤しんでいた。そのさらさら とした髪は粉砂糖の色をしていて、それがふと違和感を覚えさせる。 その理由はすぐに分かつた。記憶の中の少女の髪は白銀色だったの だ。だが、今の少女の髪は、混じりけのない純白で、目を射抜く輝 きを発してはいない。もしかしたら、学校で見たあの銀は、眩しい 太陽がみせた悪戯だつたのかもしれない。

不意に、少女が初めてこちらを見た。人間らしい情の欠如した、 冷徹な双眸を向けられて、僕は一瞬、怯む。^{ひる}少女は僕が起きている ことを認めるに、口を小さく開けた。多分、何か呟いたのだろうが、 詛男と乱暴女の罵声のお陰で、その声は聞き取ることができなかつ た。

少女は座っていた椅子から降り、喧嘩真っ最中の一人に歩み寄る。彼女が歩くたび、黒いワンピースの裾が優雅に揺れた。

少女が近くまで寄つたところで、彼らは彼女に気付く、そこで口を噤んだ。

「お客さん、お用覚めよ」

少女の柘榴色の双眸が、鋭く僕を見据える。氷のような冷たさを孕んだその瞳は、僕を認めた瞬間、ちらりと揺れた。

ついさっきこの目に見つめられたときは、なんて無感情なものだろ、と思った。同時に、彼女はこういう人間なのかも知れない、とも感じた。感情の起伏があまりないか、あつてもあまり表に出さない種の人間。あまりにも心が表面に出ないものだから、こんなにも冷え冷えと映るのだろう、と。

でも僕はその自分の考えに、今、疑いを持った。

違う。いや確かにこの少女はもともとそんなに表情豊かな方ではないのかもしれない。けれど心を見せていないのではない。

そう、見せているからこそ、こんなにも凍りついているのだ。

一瞬だけ露わにした、瞳の中に潜む研ぎ澄まされた刃。そしてそれは他でもない僕に向けられていた。

言葉にするのなら、憎悪。

そんな馬鹿な、そんなはずはない、と僕は思い直す。僕には少女の恨みを買わねばならない心当たりなど全くないのだから。多分、僕の被害妄想か、見間違いだ。

半分身を起こしたまま固まつた僕を不審に思つたのか、少女は眉を顰めた。そしてふいと顔を背ける。

「お早う、君は丸一日眠つていたよ。調子はどうだい、繩田君？」

面白そうに声をかけてきたのは、先ほどの乱暴女だった。名前は確か野々瀬のせなかと、か言つたか。

「え、あ……」

咄嗟に何をどう返したらいいのか分からず、言い淀む。すると男の方が助け船を出してくれた。

「あんだけ全身に打撲あつたら、気分は良くないやろ。ま、数日大人しくしておけば軽くなるわ」

男は人の良さそうな笑みを浮かべる。

「あ、あんたら一体……？」

「俺は西野雷にしのの、雷らいって呼んでえや。一応、ここでは機器専門せんもんつてことになつとる。……ほんで、俺のカレー‌パン食つたこの粗野な女が

……つ痛！」

「私はお前のカレー‌パンなんぞ食べてないし、粗野でもない」

野々瀬は雷の頭に容赦なく拳を見舞させていた。雷は頭を押され、彼女を睨め付ける。

「野々瀬……」

呆然とその名を口にしたのは、雷ではなく僕だった。野々瀬は片眉を少し上げる。

「ほう、名乗つたのは一度だけだつたが、覚えていたか。どうやらその頭は飾りではなかつたらしい」

初対面の時と変わらずの嫌味つぶりに、僕は顔を顰めざるを得ない。

どうやらこの女と、仲良くしていぐのは無理そうだった。勿論、そんなつもりなど毛頭ないが。

一方、雷は意外そうに僕と野々瀬を交互に見る。

「なんや、会あうたことあるんかいな。……あと、ここにいる女の子が天井野薔薇あまごのばら、あんたの仲間や」

「……仲間？」

少女 野薔薇はちらりと一瞥いちらべをくれる。けれどそれ以上のことはなく、この場では当然、有り得そうな、宜しく、初めてまして等の言葉を発する」とはない。ただ無言で、また目を逸らしだけだった。

「と、いつわけで、これから田舎町を同じくする同志として仲良くやつていこうな。繩田水流君、区域D i s a s t e rへようこそ！」
雷は含みのある笑いを浮かべ、僕に向かって手を差し出した。

区域 D そこは荒れ果てた世界。遙かなる昔に破壊しつくされ、
搾取されつくした環境のみが延々と広がる場所。

乾いた赤い砂には栄養もなく、そこに育つ植物は殆どない。淨化する木々がないその場所の空気は濁り、有害物質が至る所を飛翔している。それが益々、土を汚し、それでも必死に生きようとする生き物たちの命を容赦なく齧かし、奪っていくのだ。

吹き荒ぶ熱風は肌を傷つけ、建物の外で立つていくとすら苦痛を覚える世界。

故に、そこは区域 Disaster と呼ばれていた。区域 D の D がディザスターという意味を含んでいるのではない。その区域に D の記号がふられるのが先だつた。しかし、誰が呼び始めたというのでもなく、D からディザスターと呼ばれるようになつたのだ。

区域 C が Clear として知られるのに対し、Disaster 「、と。

災害、惨事、不幸 区域 D はまさにその呼び名の相応しいところだつた。

そして僕はどういうわけか、妙な奴らに連れ去られ、そんな区域 D に身を置いていた。

「え、あ、あれ？」 いつこつ時は君の方からも手を出して欲しいんやけど……

雷が手を出したまま、困ったように苦笑いを浮かべる。でも僕は、正直それどころではなかつた。

「ちょっと待てよー 何だよ、仲間だとか、同志だとか！ 僕はあんたらのことなんか全然知らないし、仲間になつた覚えもないんだけど」

そう叫んで、三人を顔を見渡す。まるで戦闘着のような、身体の曲線を綺麗に出す衣服に身を包む野々瀬。あちこちに汚れが飛んで

いて、ところどころ裂けてすらり、よれよれの作業着の雷。そして、一人よりは比較的小綺麗な身なりではあるけれど、白いフリルさえついていなければ喪服と見まじう、黒を基調としたワンピースを着ている野薔薇。^{のばら}三人が三人とも、区域Cでは見ないような、一風変わった格好をしていた。そんな彼等のその服装は、ただならぬものを感じさせるには充分なもので。

極めつけは、貧困そのものの不潔で暗いこの部屋。更に、その部屋に散つている武器や防具。平安とは懸け離れた、物騒なそれら。

これ以上の説明は不要だつた。聞かなくても分かる、こいつらはアンガバ 区域Cの繁栄を潰す反乱組織の一つだ。

区域Cが軍事都市に囲まれているのは、そういう理由があるからだ。C外にはその存在を快く思わない輩^{やから}が跋扈^{ばっぴ}している。彼らは区域Cの恵まれた環境を妬み、隙あらばそれを破壊しようと奴らだ。

区域Cの中でも研究機関の充実した碧水学園^{へきすい}に侵入することといい、じゅうやつて区域Dに拠点を構えていることといい、こいつらが反C組織であることと何の矛盾もなかつた。

雷は呆然とした顔になる。そして、僕と女二人を見比べた。

「彼は何も知らないんだ、雷」

野々瀬が腕組みをしたまま言つた。すると雷は、額に皺を寄せて眉を上げる。

「え？ そうなん？」

野々瀬は僕の方に視線をやる。そして前髪を搔き上げて、軽く嘆息した。

「さて、何から説明したらいいものやう……」

「……あんたら、一体、何なんだよ！ 何で俺をここに連れてきた」とすると、彼女は今度は深く息を吐く。

「全く、助けたのだから感謝されてもいいが、こんなに瞼みつかれる筋合^はいはないんだがな」

「は？ 僕はあんたらに助けられた記憶なんてこれっぽちもねえん

だけど！」

「無知とは厄介なものだな。……でも何も知らない君も、苑華のことは知つていいだろ？」

野々瀬の口調はどこまでも傲岸不遜だつた。それでも思わず息を呑んだのは、よく知つていてる名前が彼女の口から発せられたからだ。耳に馴染みのあるその名前。会えなくなつてからでも、ふとその名を聞くだけで心に小さな動搖が走る。いなくなつてから、その大切さに気付くなんて、ありふれた話だ。だが、それでも僕はその意味を身を以て知つていた。

忘れたつもりでいても、胸のどこかでちくりと棘が刺す。会えないという、傍にいないという痛み。そして今この時も、その小さな痛みで、平常心を完全には保つことができないのだ。

「苑華つて……」

呟く声は、知らず掠れていた。口の中が、急に貼り付くように乾き、喋りにくい。

「そう、白星苑華のことだよ。知つていいだろ？」

「何で……あいつとあんたらと何の関係が」

「我々は彼女を助けたい。そして君の協力が欲しい」

「助ける……？」

野々瀬は近くにあつた机の方に体を向ける。乱雑に散らかつたその上を、更に引っかき回して、彼女はテンペを引っ張り出した。

所々が痛み歪んだそれは、画面自体にも傷んでいる部分があり、加えて画質そのものも粗かつた。見た感じ、恐らく一十年ほど前の代物ではないかと思わせるほどの、古品だ。しかも壊れかけている。

この区域Dでは、そんなものでさえも手に入れるのがやつとなのだろ。さり気なく周囲を見渡せば、そこら中に置いてあるのは一昔前の製品や、或いは自作したと思われる不格好な塊ばかりだった。僕は急に自分がタイムスリップしてきたかのような奇妙な感覚に陥る。

野々瀬はそんな僕に、傷だらけのデンペを広げた。

「それでは、このニュースは知っているかな?」

促されるがままに、それに目を通した僕は、唾を飲み込んだ。

読まされたそれは、つい最近知ったばかりの記事だつたからだ。

『神谷紫苑社長ご令嬢苑華さん、十五日急性心筋梗塞のため死

去。享年、二十五歳』

僕は息を呑んだ。

胸内で一つの小さな泡が生じる。そしてそれは、大きく成長し一気にその数を増す。腸が煮えくりかえるような怒りは、そのまま心の大部分を埋め尽くしていった。

不快だつた、不快なこと極まりなかつた。

苑華、死んじやつたんだつてえ!

耳の奥から、跳ねるような音酉の声が響いてくる。

僕は知らず拳を固く握りしめていた。

「お前らまで……つ! 一体何考えてんだよ…… その記事がどうしたつてんだ。この苑華はあの苑華じゃねえ!」

溢れ出す激情をそのまま、目前に佇む女にぶつける。しかし、野々瀬は嫌味なほど冷静で、表情一つ変えようとはしなかつた。

「はて、『まで』……? 私の他に誰かに言われたのかな? ……まあいい。取り敢えずはつきりしているのは、この記事に載つてゐるのは、君の言うあの苑華、だ」

「んなわけないだろ! だつてあいつの年齢は、俺と同じで今は十

七のはずだし、第一、誰も神谷のどこに行くなんて言ってなかつた。あれはあいつの法螺だ！」

すると、野々瀬は目を細める。そして相変わらず静かに落ち着いた声で呟いた。

「ほう……、君の台詞からすると、苑華は君にだけはあの男のどこに行くことを伝えていたわけか、成る程、成る程」

「だから、それは嘘だつて言つてるじゃねえか！」

僕は粗く息を吐く。自分でも、何に対してもこんなにも腹を立てているのか分からなかつた。

また苑華をネタに使われたことか？ それともこんな訳の分からぬ奴らに、あいつの名前を口にされたことか？

それとも。

「そう、この記事は嘘だ」

「は？」

呆気なく否定され、虚をつかれて僕は言葉を失う。

何の脈絡もないように会話を進める、野々瀬の意図が理解できなかつた。

彼女は椅子に腰を降ろして、机に両肘をつき指を組み合わせる。そして親指で自分の顎を支えながら、吐き出すように言った。

「白星苑華は死んでいない、生きている。極めて危険な状態にあることは確かだろうが」

「え……？」

意味が分からず、僕はまじまじと野々瀬を見つめる。

彼女は少し顔を横に向けて、野薔薇に声をかけた。

「そうだろ、野薔薇？」

濁りのない白髪の少女は、一つ瞬きをして答える。

「ええ」

だが、それ以上は何も言わなかつた。野々瀬は思わず苦笑する。

「あいつだけは、苑華の思念を受け取ることができんだ。エデンだからな」

その説明は全く要領を得ないものだった。

けれど、一つの単語に引っかかりを覚える。決して見過ごすことのできない、その響き。

私はもう一つ名前を持つていて、昔、『エデン』と呼ばれていました

僕は瞠目した。

エデン それは苑華が最後に残した彼女のもう一つの呼称。その時は特に気にしてはいなかつたのだけれど。

それがまた出てくる。彼女の名前と共に。

「何なんだよ……エデン、って。あんたら、一体苑華の何なんだ？」

野々瀬は暫しの間黙つていたが、やがて近くにある椅子を顎でしゃくつた。

「話が長くなりそうだから、まあ取り敢えず座りたまえ。立ち話もなんだしな。ただでさえ君は怪我を負つていてる身だし」

言われるがままに、僕は腰を降ろした。

しかし次の瞬間、尻の下に奇妙なものを感じる。何か柔らかいものがあたつたのだ。上半身の重さに簡単に屈してしまって、抵抗のない感触。

僕はもう一度立ち上がり、その妙な物体を確認する。そして哀れなそれを摘み上げた。

「あの、これ……」

背もたれに寄りかかり、すっかりくつろいでいた野々瀬は首を傾げる。ところが僕が手にしているものを認めるに、にわかに田つきが鋭くなつた。

「それは……！」

雷までもが立ち上がり、口を開けている。

「あの、すいません、俺、この上に座っちゃつたみたいなんだけど

……

僕が持っていたもの それは、ひしゃげて中身がグロテスクに露出したカレーパンだった。

透明の袋に包まれていたから、僕の手や尻や椅子が汚れることがない。だがパンは、押し出されたルーと、圧力による変形のために、無惨な形骸けいがいを晒している。

「あ、ああ！ 僕のカレーパン！ パンの上に尻を乗せると……
とんだ罰当たりなやつちや！」

雷^{らい}が僕の手から、カレーパンをひったくる。反射的に再度、謝罪したものの、僕が一方的に恨みがましい視線を投げつけられるのは、何かが違うような気がした。

「うるさいぞ、この穀漬し！ みる、やっぱり私のせいじゃなかつたんじゃないか！ まずは濡れ衣を着せたことを謝れ！」

野々瀬^{ののせ}が今度は雷の腰に、一発拳^{こぶし}を入れる。それが引き金になつて、一人はまた罵詈^{まじ}雜言の数々を浴びせ合い始めた。

まったく、たかだかパン一個でどうしてこつも本気になれるのだろう。そもそも、多少潰れていたって食べられないわけじゃない。とはいっても、袋で保護されていたものの、男の尻の下に敷かれたものを、何の抵抗も無く食せるかと問われれば、僕だって流石に躊躇^{ちうりゆ}するもしかりが、どうしても潰れているのが嫌なら、また買つてくれれば済む話だ。

全く、本当に……。

「理解できない」

まるで心を読み透かされたかのような言葉に驚いて、僕はその冷たい声の主をみた。

「今、そう思つたでしょ？」

野薔薇^{のばい}は目を細める。はつきりした二重に飾られた長く整つた睫毛^{まつ毛}が、ふり零れるような妖しさを放つている。

僕は喉の奥が石膏で塗り固められてしまつたかのように、何も返すことができなかつた。

「そう、理解できないのよ。あなたみたいにこから来た人たちにはね」

「ちらを見下すような声色が、針のよつに突き刺さる。白い顔の

中で薄く色づいた桜桃の唇は、特に形を変えていない。それなのに、そのはずなのに……何故か僕は、その桜桃に噛われているような気が、した。

野薔薇は細い腕を、つい、と野々瀬の方に延ばす。そして抑揚のない声で言った。

「琳、まだ話の途中」

ぎやあぎやあと喰いていた乱暴女は、すぐに我に返りまた椅子に腰掛ける。

「や、これは失礼。で、何の話だったかな?」

カレーパン一個のせいで、僕でさえも忘れかけていたが、すぐに思い出した。

それは覚えていたつもりはなくとも、記憶に残っていた鍵。

「エデン……、エデンって何なんだ?」

野々瀬が先ほど口にした『エデン』と、苑華の言う『エデン』とは全く関係のないものなのかもしれない。それでも聞かずにはおられなかつた。

「エデン 全ては神谷の^{かみや}エデンプロジェクトから始まつたんだ」

「エデン・プロジェクト?」

野々瀬は腰に巻いた小型のバッグから、四角い板を取り出す。それを開くと一人の男の上半身の立体映像が現れた。太い眉の、がつしりした顎をした中年の男。その精悍な顔立ちの下にはEden Companyと記された文字の帯が流れていた。

「神谷紫苑社長、表向きは大手情報社の社長、ということになつているな。君も名前ぐらいは聞いたことがあるだろ?」

知らないはずはない。

エデンカンパニーはもともとそれほど有名な会社ではなく、大きくなかった。それがここ一年で、その名を知らぬものはないほどまでに、急速に成長した。そしてそれを可能にしたのが、エデンカンパニーの社長、神谷紫苑というわけだ。ところが彼は希代の変人で、支社どころか本社ですら区域C内に置いてはいない。

また、実はそんな彼の養女であつたと言つて、苑華は区域Cから出ていった。

「そいつが、どうかしたのか？　まさか苑華は本当にそいつのところに……」

「苑華は神谷にとつてはなくてはならない存在だつた、それは確かだ。だが、それはあくまでも過去のこと。奴は苑華が邪魔になつた」

「邪魔？」

「苑華はエデン・プロジェクトから離反した。苑華が区域Cを去つたのは、神谷のところに自ら乗り込むためだ。戦いを挑みに、な。結局は負けたようだが」

「何……だつて？」

「この女は何を言つているんだ？」

戦う？　誰が？　誰と？　何のために？

負けた？　何に？

理解が追いつかず、胸の内で反芻する野々瀬の言葉が、ただするすると流れている。

突飛すぎた。余りにも突飛すぎて、その内容が心の中に落ちることはなかつた。

そして気が付くと僕は盛大に笑いだしていた。その場にいる全員が、僕を奇妙な目で見る。でもそれにも構わず、ただひたすら笑い続けていた。

「ばつかばかしい。そんな作り話で、俺を騙せると思ったわけ？ 分かったぞ、あんたらはただの誘拐犯で、区域Cの住民を妬むテロリストだろ！　欲しいものは何だ？　金か？　仕事か？　言つてみろよ！」

言い募るほど内なる轟音が増してくる。頭の中からか、胸内からか、耳の奥からか、それとも全身からか、皮膚に振動が伝わってきそうながらいの轟きが起こる。けれど轟きは、皮膚を突き破ることなく、代わりに無分別に臓腑を蹂躪し、体内で猛威を振るつ。

行き場のない負のエネルギーを、僕は握り拳で机に叩きつけた。拳の底がじんじんと苦痛を訴える。でもそれ以上に、僕は胸の内の激しい渦に支配されていた。

「違う！ 作り話でも何でもない！」

野々瀬^{ののせ}が声を荒げる。だが、僕はそれすらも叩き潰すような勢いで叫んだ。

「俺の家を爆破させたのも、どうせあんたらなんだろ！ 返せよ！ さくらを返せよ！ 母さんを帰せよ！ 俺の日常を返せよ！ 」
もう一度、拳を叩きつける。鋭いよつた鈍いよつた痛みが走った。どこか切つたのかもしれない。

けれどそこまでしても、強く速い胸の鼓動は止まらない。鼻と喉の奥が圧迫されるような感じを覚えて、目頭が熱くなつた。

「返せよ！ なあ、返せ！」

頬を流れる熱を抑えることも忘れて、僕は声が枯れそうになるまで叫んでいた。

頭の前部が押し潰されるように痛い。胸内で猛威をふるう激情に、そのまま翻弄され、我を失いそうになる。そのまま、激しい怒りに意思を飲み込まれそうになつた時のことだつた。

「あなた、うるさい」

全ての光を跳ね返す硝子のよつた声が、僕の鼓膜を打つた。

いつの間にか、野薔薇^{のばい}が僕の目の前に一本の指を突き出していた。いや、正しくは額の前に、だ。

そして彼女の長い髪は、不可思議な輝きを纏っていた。一本一本が煌めく銀に染め上げられ、淡い燐光を帯びていたのだ。

「少し黙つて最後まで話を聞いたら？」

彼女が言い終わらないうちに、体が不可視の何かで縛られる。動かそうと思つても体が言つことを聞いてくれない。抵抗すればする

ほど、益々がんじがらめに拘束されていく。

これは以前にも体験したことがあった。そう、僕の家が爆破がされる直前、僕を窓まで動かしたあの力だ。

「野薔薇、こいつにはこいつの思いつてのあるやう。まあ勘弁してやれ」

雷^{らい}が頭を搔きながら、少女を宥める。

少女は僕の目を見て、屈辱にも降参の意を汲み取つたらしく、挙げていた手を下ろした。途端に彼女の髪はもとの純白に戻り、そして僕の身体も解放される。

ただ、先ほど受けた圧力の気持ち悪さだけが遺されていて、僕の息は上がっていた。

野々瀬が口を閉じたまま、鼻で大きく息を吐く。

「言つておくが、君の家に爆弾を仕掛けたのは我々ではないし、しかもその災厄から君の身を守つたのは野薔薇だ。そこは誤解しないで貰いたい」

僕はといえば、先ほどの正体不明の力がまだ体のどこかに残つているような気がして、気味悪さのために精神的余裕などなかつた。だから、一つ頷くのがやつとだつた。

野々瀬は、ほつと安堵の表情を浮かべる。

「分かってくれたのなら、それでいい。……それと、野薔薇のことあまり不気味に思わないで欲しい。彼女もまた、エデン・プロジェクトの被害者なのだから」

エデン その単語が琴線に触れた。

エデン・プロジェクト。そのプロジェクトを発動させた神谷と、苑華^{そのか}は戦いにいつたと、野々瀬は先程、確かにそう言つた。

でも何の戦いだというのだろう。そして苑華が挑んだものは何だ？ 未だ震えの治まらない手を握りしめ、野薔薇に對して感じていた恐怖を無理矢理押さえつける。そんなものに取り憑かれている場合ではなかつた。知らなければならぬことが、あつた。

「何なんだよ、エデン・プロジェクトって……？」

野々瀬は切れ長の目で僕を直視した。気丈さを感じさせる、力強い眼差し。曲がることなく、迷うことなく真っ直ぐにこちらを見つめてくる。恐らくその視線だけで、圧倒される者も少なくはないはずだ。

「神谷が一番恐れていたもの、そして今も恐れているものは何だと思つ?」

彼女は柔らかみの欠片も匂わせない、けれどどこかそれが返つて艶めかしさを漂わせる声で問うた。

そんなこと知つてているはずもないし、想像もつかない。僕が黙つていると、野々瀬はまた口を開いた。

「それは『老い』と『死』だよ。そして『自分の思い通りにならない世界』」

「え？」

「だから神谷は、老いも死もない、そして自分の思い通りになる世界を構築しようとした。それがプロジェクトの始まりだ」

「ちょっと待てよ。そんな世界なんができるわけないじゃないか」

野々瀬は長い人差し指を立てる。そして早口で捲し立てた。

「そう、できるわけがない！ でも奴は狂っていた。奴は神になろうとしたんだ」

「神つて……」

「けれどそんな楽園を造るためにには、まず研究が必要だ。そして研究のためには実験が、その実験のためには実験台が必要だつた。」
 神谷はそこで、区域Dにひつそりと暮らしていた、一人の少女に目をつける。両親をとうに亡くし身寄りもなく、かつこれといつて目立つた存在ではなかつたその少女は、実験には打つて付けだつた。神谷は食べ物に困らない生活と、学問に打ち込める環境を用意することを条件に、彼女に実験台になることを提案したんだ。それまで死ぬか生きるかのぎりぎりのところで彷徨つていた少女にとつては、断る理由なんてなかつた。おまけに成功すれば、永遠の命が手に入るというのだからな」

嫌な予感がした。何かとてつもない嫌な予感。そしてこりう予感は往々にしてよく当たるということを、僕は知つてゐる。
 それ以上の話は聞きたくなかった。けれど野々瀬はまた話を紡ぎ、僕の耳は僕の意思を無視して、確実にそれを捕らえるのだ。

「人の遺伝子にはテロメアという構造が存在する。簡単に説明すると、人は細胞分裂の度にこの構造が短くなり、その短くなつた分だけ老化が進む」

それを聞いて、僕は幼い頃に読んだ『蠟燭の話』を思い出す。
 死の世界には無数の蠟燭があり、その一本一本に名前が刻まれ、刻まれた人の寿命を決定している。蠟燭は燃えるうちに次第に短くなつていき、限界まで短くなつたところで炎が消え、そしてその炎が消えたとき、その蠟燭に書かれた名前の人間は死ぬのだと。
 人を構成する数え切れぬ細胞の数々 その中に揺らめく灯火を見た気がして、僕は頭を振つた。

野々瀬は続けた。

「だが、そのテロメアを伸ばすことのできる酵素が存在する。それがテロメラーゼと呼ばれるものだ。……神谷はそれに目を付けた。

簡単に言うと、神谷はテロメラーゼを永遠に産み出し続ける命令を持つ遺伝子コードを、実験台の少女の中に埋め込んだ。所謂、遺伝子操作つてやつだな。実際はもつと複雑なものだつたが「語る彼女の口調には、激しい怒りが潜んでいた。努めて穏やかにしようとしているようだが、それでも彼女の中で煮え滾る、やり場のない憤りが見え隠れしていた。

「少女の成長は途中で止まり、実験は成功したかにみえた。でも、結局は失敗した。当たり前だ、寿命のない人間など作れるものか！実験台にされた少女の身体の至る所には、腫瘍が生じてしまった。腫瘍はそれ自体が寿命を持たない出来物だ。人の細胞は生と死のサイクルを繰り返して数を保つていて、その出来物はプログラム死を知らないままに無限に増殖していくんだからな」

想像の蠅燭が膨らみ高く伸び、その巨大な炎を揺らめかしていた。炎 자체で生命そのものを齎かす。蠅を飲み込んでしまうほどの勢いで、成長しゆく狂炎。

人間の当然あるべき死と生のサイクルを狂わされ、体中に死なぬ塊を持つたモノ。それは一体、何なのだろうか？ その身体を操っているのは何なのだろうか？ 肉体という器の主はヒトか？ それとも出来物か？

いつの間にか、野々瀬は喋ることを止めていた。そして、無言で僕を見つめていた。

苦渋を抱えた瞳で、微かな哀れみを忍ばせて、僕を見ていた。

「それが苑華だよ」

「……つ」

「白星苑華。奴らチームの間では、エテンと呼ばれていた」
全身に一つ、大きく震えが走った。

樂園つて意味なの

僕の脳裏で苑華が囁く。

そんな馬鹿な、そんなはずはない。

あいつの身体が人工的な病苦に苛まれていたなんて、そんなわけがない。

確かに弱々しく纖細な印象はあった。だけど、あいつは普通に僕と話していたし、いつだって笑っていた。

「信じねえよ！ んなこと信じられるかよ！ どうせ、お前らの作り話だろうが！」

嘘に決まっている。そんなことあるわけがない。

記憶の中の苑華は、常に笑顔だった。混じりけのない純粹な笑顔で、いつも僕を圧倒していたのだ。ただの笑顔が力を持つということを、僕は彼女に会つて初めて知つた。

苑華は、およそ負の感情を知らないような奴だった。だから僕は、いつも彼女のこと、何の悩みもない脳天気な奴だと、そう思つていたのだ。そしてそんなところが妬ましくて、からかつたりもした。そんな時だつて、苑華は笑つていた。

陰謀、策略、野望……そういうもののからは、とても遠いところにいるような存在に見えていたのだ。それなのに。

「こんな趣味の悪い嘘を吐いてどうする」

内に燻る怒気を孕んで、野々瀬が言つ。苛烈な瞳で以て、僕を睨みつける。

「繩田君、気持ちは分かるが聞いて欲しいことはまだあるんだ」

「これ以上何を聞けつて言うんだよ！」

僕の中で橙の火薬が、一つ揺らめく。

その炎で、今、目の前で喋る相手の喉を焼き潰し、この耳の鼓膜を焦がしてしまったかった。

けれどそれは想像上のことで、現実では残酷な野々瀬の物語は続
くのだ。

「神谷^{かむや}が欲しかったのは永遠の命だけではない。自分が支配できる世界が欲しかった。だから苑華^{そのか}は遺伝子操作の他に、チップを埋め込まれたんだ。でも神谷が入れたかったチップを全て備え付けることは不可能だつた。先の実験で、彼女の身体はだいぶ蝕まれてしまつていたからな。だから……」「だから今度は、研究員の娘の肉体を使つた

透徹とした声を飛ばしたのは、赤い目の少女だつた。その声は決して大きくはなかつたのに、何故かよく響いた。

「野薔薇^{のばら}……」

「研究員は喜んで娘を差し出したわ。自分たちの研究の成果を上げたかったし、自分の娘を実験台に使うといふことを誇りしく思つていた」

かつん、と赤いヒールを響かせて一步、進み、彼女は僕との距離を詰める。

肌を冷氣が掠めた気がした。皮膚が内側から撫でられるように泡立つのが、自分でも分かる。しかし、彼女が何かをした様子はなく、彼女の髪は相変わらず純白を保つていて。

気付けば陶磁器のようなその顔は、すぐ近くまで迫つていた。

嵌め込まれた二つの氷の瞳が、ひたと僕を見据える。色素の薄い唇が、僅かに開いた。

「この世界では様々な種の電磁波が飛び交い、そして都市を動かしている。空間そのものを振動させ、多くの種類の波を作り、信号を送る。そして受け取つた信号で、都市の機器は動作し、時に情報を送受信する。特に区域Cはそうよね」

野薔薇の声は淡々としていた。そしてそれが逆に気味が悪かつた。

「神谷はこう考えたの。もしこの信号を人間自身が発し、そして受け止めることができたら、と。そうして実験台となつた娘の脳にチップを埋め込み、四肢の至る所に波を自在に発生する装置をつけた。その波は電磁波とはまた性質を異にするもの。体内から自在に発することができ、かつ電磁波よりも強い力を持つもの。チームは彼らが開発したその波をEden Dyne 即ち、エーダインと名付けたわ。そして娘はこう呼ばれた、エーテン一號、と……」

エーダイン この単語を、つい最近どこかで聞いた。

あんまり無理すんな、野薔薇。お前、エーダイン使いすぎや

そうだ、あの時。野薔薇が奇妙な文字の羅列を呟いて ビジヤ
つてかは知らないが 学園側の航空機を操つた時だ。

僕の中で何かが弾けた。

そう、彼女は他にも色々な不可思議をやつてのけた。僕の身体を操作し、張り巡らされたコードを破壊し、窓を瓦解させた。

尋常ではないその現象の数々。それを起こすことを可能にしたのが。

「エーダイン。それを娘は確かに得た。……でもその実験にしても成功とは言い難かった。娘の黒髪は白く変色し、両目からは永遠に光が消えた。消えたのは光だけではない。彼女がそれまで知っていた音、食べ物の味、ものの触覚、空気の中に混じる様々な匂い、それらが全て奪われたの。彼女から五感という能力は消えた。できるのは、全身に取り付けられた探知機で、外界の情報を受信し、それを処理することだけ。それは今まで彼女が当然のように知っていた感^ク覚質^{オリア}の世界とは別のものだつた」

彼女の白い髪が、不意に風もないのに舞い始める。そして毛先から少しずつ変化が訪れる。一点のシミもない純白から、銀のそれへと。彼女自身が、無意識に発する波力によって、その髪が染め上げられていく。

「それだけではない、波力は無限ではなかつた。それを使う度に、彼女の体力は消耗していく。それは確実に寿命を縮めていく。それでは意味を為さない。神谷が欲しい永遠の命と力とは程遠いのだから」

野薔薇は、ふと遠くを見つめた。ここではないどこか遠くを。

でもその目つきは鋭く、はつきりと何かを睨んでいた。

今まで黙つていた雷が、溜息混じりに口を開く。

「もう分かつたやろ、エデン二号機はこいつ 野薔薇のことや。俺らは許せんかった、神谷の横暴が。そしてこれ以上、犠牲者を増やしたくなかった。……せやから苑華さんも、研究に積極的に協力する振りをして、神谷の許へいつたんや。結局は返り討ちに遭うて、捕らえられてしまつたみたいやけどな」

「え……」

捕らえられた
？

僕は目を瞠つた。

野々瀬が握り拳を作る。

「我々は苑華を助けたい。そして神谷の企てを止めたい。……だから、君に協力して欲しいんだ」

重たい沈黙の緞帳じんちようが落ちる。

俯いた自分に注がれる視線を、僕は痛いほど感じていた。三人が答えを待つていた。

腕が震えた。唇も上手く動かすことができなかつた。

ひしひしと皮膚を通して伝わる期待という名の圧力。『是』という返事を疑つていないと、いや、むしろ『是』ということを強いるような、威圧するようなこの空気。

今、この胸内に渦巻く感情を何と名付けたらいいのだろう。

ややあつて、僕は自分で出した回答を絞り出す。嗄れたその声が、三人の表情を強ばらせた。

「やなこつたよ……」

「な……」

「やなこつたって言つてるんだよ！」

自らそう言いながら、苦いものが口の中に広がる。

そうではないだろう、ともう一人の僕が、僕自身を詰る。まるで理不尽な罪悪感が、僕を責める。

だが、耐えられなかつたのだ。

知りたくもないことを知らされ、頭の混乱が治まらないうちに、まだどうするか決めてもないいうちに、選択を用意されるこの状況が。

「正直、俺にはあんたらの言つていることが本当か嘘かも分かんねえ。しかも、何で俺なんだよ！ 理由を聞かせろよ、理由」

三人は顔を見合わせる。それぞれの面には、複雑な表情が浮かんでいた。

何も言わない彼らに畳みかけるように、僕は怒鳴りつける。

「ほら答えられないんじやないか！ 僕を家に帰せよ！」

家、と自分で言つてから、その『家』がないことに改めて、気付かされる。

ほらこんなにも自然に、口から飛び出していくと、帰る場所はもうどこにもないのだ。当然のこととして身体と心が無意識の中に記憶しているのに、その記憶の現実はもはや跡形もなく崩れ去つている。

瞼裏に鮮烈に浮かび上がる火焔。皮膚を裂く粉塵の痛みさえ、生

々しく思い起こすことができた。

急に呼吸が苦しくなる。見えない手で喉をきつて締め上げられて

いる気がする。

ひゅう、と喉の奥が鳴った。それに抗おうと喉元に手をやわらぎとしたとき、野々瀬が言葉を発した。

「ある、理由なら。君は我々に協力しなければならない義務があるんだ」

「義務？」

想定外のことを言われて、僕は問い返した。

呼吸苦は完全に消失したわけではなかつたが、彼女が伝えようとする何かが、喉がこれ以上絞められるのを押しとどめていた。

彼女の口から、言葉を発する前の小さなブレスが漏れるところが。

「琳」

厳しくそれを制する声が割つて入る。それは野薔薇のものだつた。野薔薇は目を伏せ、唇を左右に引き結んでいた。

それが何を意味するのか僕には分からない。それでも野々瀬と雷には通じるものがあつたらしい。彼らも一瞬目配せした後、それぞれに視線をあらぬ方に向けてしまつた。

「……？」

僕は不審で眉を顰める。

「……くよ」

不意に白髪の少女が呟いた。その声はあまりにも密やか過ぎて聞き取ることができず、僕は口を閉じたまま、彼女の方に目を向ける。少女は再度、言つた。

「ラグナロクよ。苑華はあなたにそれを託したはずよ

「え……？」

「彼女は自分が失敗したときのことと想定して、あなたに終末コードを受けた。それがラグナロク。樂園崩壊のパスワード」

「何だ……それ？ 僕はそんなの知らねえよー」

「あんた、ほんまに覚えてへんの？」

雷が呆れたような顔をする。それが余計に腹が立つた。

覚えてないのかと聞かれても、知らないものは知らないし、分からぬものは分からない。

むつときたものを露骨に顔に出してしまったのか、雷が僕を見て、やれやれと言わんばかりに深く息を吐く。

「こりや、色々と難儀やなあ……」

そのただでさえ細い目が、更に細められる。

むかむかした。身に覚えのないことで、襲まれたよつな気がして、苛々した。

「いいのよ、強制はしないから」

野薔薇が静かにその場に声を落とす。

「あなたが私達に協力したくないのなら、すぐにでも解放してあげる。でもこれだけは忠告しておくわ。……区域Cには戻らない方がいい

「は？ 何でだよ？」

「最初に琳が言つたでしょ、あなたを助けたつて。あなたの家を襲つたの、あれは誰の仕業だと思ってるの？」

「お前らがやつたんじゃないのか？」

一番最初に持つた疑いが、つい口をついて出た。刹那、三人の表情が険しくなつた。

「だからそれも言つただろ、我々ではない、と！」

野々瀬が声を張り上げる。同時に彼女は、平手で机を叩いた。ばあん、という空気を割るような音が室内でこだまする。彼女は本気で怒つっていた。続いて、低い声で、下から響かせるように言つ。

「いいか、君の家を爆破させるよう指示したのは、かむや神谷だ！」

またもや予想外のことを見つかけられて、僕は絶句する。野々瀬は更に続けた。

「私が碧水学園を探していたのは、あれこそが神谷の実験場だったからだ。ただの学校にあんな馬鹿馬鹿しいぐらい巨大な設備など必要なものか！ 学園という隠れ蓑の許で、あいつは幾つもの人道に悖る実験を繰り返していた！ 知つていて、あそこに通う生徒の

半数は研究チームそのものの人間か、或いは関係者の子息だ。だから苑華も野薔薇もそこに通っていた」驚いて白髪赤目少女に、改めて目を向ける。すると、彼女はぽつりと答えた。

「三年前まで中等科にいただけだから、会わなかつたのかもね。髪も染めていたし、目も今ほど不気味な色をしてなかつたから、目立つてもなかつた。……もつとも、私はあなたを知つていたけれど、己自身の容姿を『不気味』と自嘲氣味に野薔薇は言つ。その口調が穏やかであるが故に、それまで彼女が受けってきた苦痛の数々は計り知れないものがあつた。

と、そこで僕はふと一つの疑問を抱く。

碧水は八年制の学校だ。十二、三歳で中等科で学び、十四歳から十九歳で卒業するまで高等科に在籍することになる。同じ敷地内にあるとはいえ、中等科と高等科は校舎も違うし、特に交流もないのとそれほど接する機会は多くはない。三年前と言えば、僕は十四で既に高等科にいたはずだから、野薔薇と顔見知りでなくとも何ら不思議ではないのだが。

僕が意外に思つたのは、そちらではない。

先程も述べたように、中等科は十二、三歳の生徒が通う場所だ。そこに彼女は三年前に通つていた、と言つた。だが、今の彼女の容姿は今どう見ても十一、一歳にしか見えない。

「え、だつて君、今何歳……？」

啞然として問つと、野薔薇は、ああ、と何でもないことのようつて答える。

「チップを埋め込まれてから、成長が止まつてしまつたのよ。脳の障害でしょうね。私が中等科までしかいられなかつたのもそれが理由。色は誤魔化せても、体型は誤魔化せないものね。因みに年齢は

十五

納得すると同時に、後悔した。

ただでさえ、身体を弄られ、人が本来持つはずの色彩そのものですら変化してしまつたのだ。容貌が幼いままであつても、おかしく

ない。それに、そのようなことをされたのが当然、いい記憶であるはずがない。

彼女の忌まわしい過去に繋がることを、軽々しく尋ねてしまつた、己の浅はかさを悔いた。

けれど野薔薇はそんな僕を言葉で咎めることなく だが、相変わらずの突き刺すような視線を投げかけながら、こう言った。

「とにかく、あなたがCに戻つたが最後、神谷かわやにまた狙われるだけよ」

そんなことを吐き捨てられても、ああそうですか、と合点ハツドクがいくわけもない。

仮に彼らの言つていることが正しいとして、僕が本当に神谷に狙われているとしてもだ。僕にはその理由が全く分からなかつた。思ひ当たること一つなかつた。

「何でだよ。何で俺がそんなイカれた奴に目を付けられた挙げ句、殺されなきゃいけねえんだよ！ そして何でさくらや母さんまで死ななきゃいけなかつたんだよ！」

忘れていた怒りが蘇る。

ぐるぐるとよく働き、家事をこなしていた母さん。生意気なことを言つた日も、本気で喧嘩した日もあつた。でもいつも、僕の食事を用意してくれ、服を洗濯してくれていた。そしてそんなことが当たり前だと、そう思つていた。

そして、常に僕の後ろをくつついてきた、妹のさくら。何でも僕のすることを真似し、無垢な笑顔で、いつも僕を和ませてくれていた。でも、あいつがもつと大きくなつたら、きっと喧嘩けんかとかもしたたりするようになるんだろうな、と何の疑いもなくそんな未来をぐく自然に描いていた。

それを一瞬でぶち壊したあの惨劇。

あれは神谷が命じたのだという。でも何故！ その理由が見当たらないのだ！

僕は唇を噛み締めた。ふつりと痛みが走り、鉄の味が口内に広が

る。

険しかつた野々瀬の表情がふと和らいで、同情の色が浮かんだ。

「それは君の……」

「あなたが終末」ラグナロクコードを『えられたから

野々瀬を遮るようにして、返したのは野薔薇だった。その声音には哀れみの響きなど微塵もなかつた。ただ鋭利な刃物で切り込むような返事。

「恨むのなら、苑華を恨みなさい。呪うのなら、そんな自分の運命を呪いなさい。私達に当たり散らすのは簡単だけれど、それこそ筋違いというものよ」

彼女の言葉の刃が、容赦なく胸に深く食い込まれる。僕はその痛みでそれ以上、言葉を紡ぐことができなかつた。

「私達の言つことが信じられないのなら、信じなくてもいい。ここを出ていきたいというのなら、そうすればいいわ。区域Cに帰りたいと言つのなら帰すし、怖いと思うのならCの外にそれなりの場所を用意してあげる。……後はあなたが決めることよ」

誰が吐いたのか分からぬ溜息が一つ、僕の傍を流れていった。

身体を逸らして首を傾ければ、遙か遠い虚空を臨むことができた。その虚空に疎らに浮かぶのは、ちらちらと瞬く星々だ。空気が濁っているのか、満点の星空、といつわけにはいかない。恐らく、星の中でもより強く光るそれだけが、いやつてやつと地上にその存在を届けることができているだけなのだろう。それでも区域Cにいた頃は、防犯のための照明のせいだ、星は僅かしか目にすることはできなかつた。星を見たいと思えば、人為的に照明を落としたそいつた施設に行かなければならなかつたのだ。その前にそもそも、ここ何年も、夜空を見上げようと思つたことすらなかつた。

「多少見辛いとはいえ、どこに行つても見えることは見えるのな……」

僕は柵に寄りかかり、誰にともなくぼんやりと呟く。こんな落ち着いた自分の声を聞くのも、何だか久しぶりな気がした。我がことながら妙なものだ。

僕が今いるのは、野々瀬達が拠点を置く建物の、外に突出するようになされた場所だつた。ベランダといつほど上品ではなく、至る所に謎の荷物が積み上げられ、床や手すりも油で汚れている。

それでもこうして外に面しているというだけで、不思議と気分は落ち着いていた。

じじ、と羽音のする方に目を向ければ、名前も知らない虫が、重なつた窓の間に挟まつたまま出られず、もがいていた。

区域Cにいたころは、窓と言えばボタン一つで壁に収納されるものであつたが、ここではそういうわけにはいかないらしい。開閉は手動で、窓と窓を重ねるようにスライドをせて動かさねばならないのだ。随分、古い構造だ。

虫は透明な檻の中を、右に左に上に下に飛びながら、出口を探している。

こんなところでも、逞しく生きている生き物ってあんのな
ほんやりとそんなことを考える。

そよぐ風は、汚染されているのかもしれない。心なしか、肌が乾燥していくような気がした。周囲を覆う空気は、有害な砂塵が混じっているのかもしれない。気のせいか、呼吸が普段よりも苦しい気がした。

でも、今すぐに死ぬとかいうことはなぞそつだつた。こという中にいたから、この外は普通の人間は生きてはいけない世界なんだと、何故かそう思い込んでいた。そんなはずはない、よくよく考えてみればこの外で生活している人間は沢山いる。むしろ人口はこの外の方が多いぐらいだ。もつとも、環境が汚染され、荒廃していることに違ひはないようだが。深呼吸をすると、咳き込みそうになる。

それでも、建物の中に閉じこもつているよりは、何倍もマシだつた。閉塞空間にいると、思考までが迷路を彷徨うことになる。

とにかく、気分を落ち着かせたかった。それも完全には無理な話ではあるが。

当たり前だ。別に何かをしたというわけでもないのに、ある日突然家を爆破され、それから間もなくして区域この外に連れ去られた。しかも、連れ去った者達は、苑華そのかを助けるために協力しろと言つた。

おまけに。

ラグナロク

「終末コードなんて知らねえよ……」

僕は吐息と共に呟いた。

本当に身に覚えがなかつたのだ。苑華が『エデン』という単語を口にしたのは、彼女が去る間際の一度だけだつた。

僕はもう一度、溜息を吐いた。そして、数時間前のやり取りを思い出す。

あんなにも感情をぶつけたのは、あの事件以来初めてのことだつた。

それまで身の回りのこと全てが、どこか現実から離れていくよつな気がしていて、そしてこの自分自身の心も、どこか遠くから世の

中を見ているような気がして、まるで夢の中にでもいるような毎日を送っていたのだ。心が泡沫うたかたの中を浮遊しているような、そんな日々。

泣いたり喚いたりすれば、それこそあの惨劇が現実になってしまいそうで怖かつた。知らず知らずのうちに逃避していたのだ。

けれど何故だろう。彼らの前で、ずっと秘めていたものを爆発させてしまった。その後の心は凧凧いでいて静かだ。それまでの嵐が嘘のように。今はただ、気持ちのいい氣怠さの眠氣があるだけ。

夜空には変わらず、星が煌めいている。気の遠くなるような距離の先にある、地球の上で僕がこんなにも悩んでいたことなど、まるで関係ないとでもいうように。

ただ、僕く輝いている。

こうやって見えている星の中には、何万光年という距離に離れているものもあるという。不思議だ。今見えてる光が、何万年も前のものだという。その時、人類は誕生していたのだろうか。いたとしたら、それはどんな生物だったのだろう。

僕が生まれる遙か昔の光。

そしてもしかしたら、今現在は消滅してしまっているかもしだい光。

少し首を動かすと、今度は月が目に入った。見事なまでに完璧な円の満月が、ゆっくりと移動している。いや、実際には動いてはないのだけれど、流れる雲のせいで、月 자체が動いているように見える。虚空に浮かぶ丸い鏡は、淡い黄色の燐光を纏い、周囲を優しく照らしながら、そこに架かっていた。

静謐。
せいひつ。

そんな単語が浮かんだ。そして今のこの情景が、その単語にぴったりだとも思った。

「綺麗、だよなあ」

世界はこんなにも汚染されていて、僕はその中に独り途方に暮れているというのに。

何にも穢されず、孤高の美しさを誇るものがある。そういうものが、まだこの世界には存在している。

白星さんはこの世界が大好きです。だって、綺麗なもので満ち溢れているから

そういうえば、あいつそんなメルヘンチックなこと言つてたつけな。疑うことを知らない、柔らかな苑華の微笑みが脳裏に浮かぶ。あれはあいつの口癖だった。例えば道端に咲く花にも、美しいと賞賛の言葉を投げかけた。ただ外で遊ぶ子供達のことを清らかだと嘯いた。

そこにある花は簡単に踏み潰されかもしれないし、第一、作られた環境の中に生きるものだ。子供だって成長すれば、根性のねじ曲がった大人になるかもしれない、そう意地悪く返してやつても、全く気にしなかった。

だつて、綺麗なものは綺麗なんだもの！

彼女は一言、こう答えるだけだつた。

なあ、でも苑華、僕は分からんのだ

記憶の中の彼女に僕は問いかける。

君が何をそんなに愛していたのか、その世界が分からんのだ。
君の見ていた世界が、僕には見えないんだ。
体中を、人の手で編み出された病魔に侵されながら、それでも笑
顔でいられた理由が分からんのだ。

本当に、分からんのだ。

僕にはこの世界は冷酷で、濁り淀んでいるよつにしか映らない。
夜空に浮かぶ月は美しい。美しいけれど冷たく無関心で、こんな
にも無力で卑小な僕を嗤つてゐるような気がする。

欲の果てを知らない人間は醜くしか見えない。区域Cの中で、今
でも平穀を平穀のままに当然として貪つてゐる、怠惰のままに日常
を送る奴らが許せない。人の苦しみを見て見ぬ振りをし、或いは退
屈しのぎのネタにしか思わない、そんな奴らが許せない。

あれ？

そこまで考えて、僕は軽いデジャブに陥る。

これと似たようなことを、つい最近、僕は思わなかつたっけ？
いや、でも違う。限りなく似てゐるけれど、何かが違う。でも何
が？ 思い出せない。

窓に閉じこめられていた羽虫は、出口を探すことを諦めていた。
隅の方で止まり、時たま思い出したように向きを変える。でも、そ
の場から動こうとはしない。

僕がなんとはなしにその様子を観察していると、ざわざわと不規
則な音が聞こえてきた。それは僕の前方からだつた。

逸らしていた身体を起こし、そしてその不審な音源を見る。そし
て自分の目を疑つた。

「水流サン 飲ミ物ヲ オ持チ シマシタ」

“あひあひ”と音を立てながら、それはカップの載つた盆を持つてくる。

見慣れた青い色をしているのではない。丸い頭もそこにはない。円錐の身体は緑色のペンキが塗られている金属でできていて、しかもところどころが剥げている。

でも、そのきこちないけれど愛嬌のある動きは確かに見覚えのあるもので……。

「お手伝いロボット……？」

呆然と呟くと、そのロボットの後ろから剽輕な顔立ちの男と、白髪の少女が姿を現した。

「おう、ちゃんと動いた！ やつぱ俺天才やわー」

雷が自画自賛しながら、腰に手をあて、何やらうつんと一人頷いている。

「ほれほれ、その盆の上にあるの取つてえや。その後の動きもチヒクせな」

何が何やら理解できず、僕は言われるがままにカップを取る。するとロボットは片手だけを胴体に収納し、もう片方の手と胴体で盆を挟んで回れ右をした。そしてまた、‘あひあひ’と鳴きながら、引つ込んでいく。

「よし、完璧い！ ……何、呆れてん？ それ飲んでもええよ。毒なんか入つてへん」

僕に言っているのだと気付いて、慌てて手にしたカップに視線を落とす。謎の汚れがこびりついているそれには、薄いオレンジに色づいた液体が湛えられていて、これまた塵だかなんだか定かでない謎のものが、ぷかぷか浮いていた。

思わず顔を顰めた僕だったが、断るのも悪いような気がして、思い切つてそれを口に含む。途端に口の中を灼かれるような、苦いような辛いような衝撃が口内いっぱいに広がり、反射的に含んだものを噴射してしまう。見事な霧が視界を埋め、そしてその液体がもうに顔に降りかかった。

「おー、いい反応、いい反応」

きひひ、と邪氣のある笑いを見せながら、雷は自分もカップの飲み物を飲む。

僕は顔と口を拭いながら、肩を怒らせた。

「酒なら酒つて、そう言って下さいよー。」

「悪い、悪い。ま、今のあんたには、ええ気付け薬やひ」

雷は、悪い、と言いながらもまだ、くつくと喉を震わせてくる。まったく、人で遊ぶにもほどがある。

しかし、じうじうからかわれているのと、不思議と悪い気はしなかつた。

雷と一緒についた少女はといえば、相変わらずの無表情でカップを「こちらはジューースのようだつた」口に運んでいた。僕が見ていることに気付いたのか、真紅の瞳だけを、ちらりといちいちに向ける。僕は慌てて視線を外した。

「実はあの口ボット、あんたの家で拾つたんや」

雷はカップの中身を、勢いよく飲み干してから言った。

「氣絶したあんたを琳さんに任せてから、俺はあんたの家に行つたんや。何か奴らの手がかりがないか、と思つてな」

彼が奴らと指すのが、神谷の息のかかつた者達のことであるのは、僕にも分かつた。

僕は手渡された酒で、唇を湿す。少しづつ味わえば、ぴりぴりとした辛さが、舌に心地よかつた。

「でも見事に破壊されとつてなんもない。時間をかけて調べれば何か見つかつたかもしけんけど、もたもたしどったら、こっちが危険やからな。……でも辛うじて、一つの回路盤を見つけてな。これは有力な情報源になるかもしけん、と期待して持ち帰つたんやけど」

そこで言葉を句切つて、苦笑いをする。

「なんのことはない、ただのお手伝い口ボットやつたぢゅーわけ。……何となく身体を引えてみたけど、どじも不具合なさそりやな。部品でも運んでもらうことにするわ」

彼は、ははは、と白い歯を見せて笑った。

「爺さんって言つたですよ、あいつ」

「へ？」

雷は奇妙な顔をする。僕は説明した。

「正式名称G-?型給仕機つていうんです。だからGさん 爺さん

ん

「じこや……」

途中まで言いかけて理解したといひで、雷は急に爆笑し始めた。どつやらかなりツボに入つたらしく。お腹を抱えて、全身を大きく揺らしている。

「爺さん、爺さんて……はつ、ひい、苦しい！」

彼は笑いすぎて田尻に涙さえ浮かべていた。

「ふつ……くつ！ そう、爺さんって、爺さん！」

つられて僕も笑つた。一人で心ゆくまで、一頻り、笑つた。こんなに気持ちよく笑つたのは久しぶりだった。

「……すいませんでした」

ある程度笑いの発作が治まつたところで、ぼくは小ちやく零す。対して、雷はまだ腹の皮を捩らせている。

「はつ、はくつ、なつ、何が」

笑い崩れながら、雷は尋ねた。

「いや、さつき……あんなに、怒鳴り散らしちやつて」

「あ、ああ……。いや、気にすんな。そんな気も分からんでもない」

さつきまで笑い転げていた青年は、ふと真顔になる。

「あんたが悪いんやない、分かつとる」

「でも、雷さん……」

「雷でええ。んで、変な敬語使つなや。氣色悪い」

彼はあからさまに顔を歪めてみせた。それが僕と距離を置かないためだと分かつてゐるからこそ、僕はふつと心が安らぐのを感じることができる。

「しつかし、困つたもんや。あんた、ほんまに苑華さんから何も聞そなか

いてへんの？」

僕は頷くしかない。隣で、雷が頭を捶きむしつた。

何も聞いてないのは、僕の責任ではないのだろうけれど、役に立てないことで罪悪感を覚えてしまう。

「あいつ……苑華は、今、どんな状態なのか知つている……？」

「…………」

「はつきり言って、俺は知らん。苑華さんの意思を受け取ることができるのは、同じ『エデン』の野薔薇だけや」

そう返答して、青年は斜め下に視線を落とした。

彼の視線の先では、野薔薇がくるくると自分のカップを回していった。が、彼女はふと、その手を止める。そして、その鮮血を吸い込んだような双眸で僕を見上げた。

「彼女は今、深い眠りの底にいるわ。……視たい？」

野薔薇は密やかな声で、僕に問う。

何を？ と問い返す前に、彼女は折れそうな腕を、僕の方に差し出した。

「野薔薇？」

雷が訝しげにその名前を呼ぶ。けれど、彼女はそれには反応せず、ただ僕の方を直視していた。

「手を……」

握れ、という意図を理解して、僕はその華奢な掌に右手で触れる。

刹那、電流のようなものが僕を貫いた。

視界が眩い白い光に支配されていく。

意識が抗えない吸引力でもって引きずられていく。沈んでいくのか引き上げられていくのか、潰されているのか、膨らませているのか、分からない。

そもそも自分の肉体、というものをまるで実感できない。ただ、野薔薇に握られている右手だけが確かな感触だった。そして僕はそ

れに縋る意外の術を持たなかつた。

鼓膜が震えないのに、音が聞こえる。

内側から叩き込まれる、ノ

イズのような響き。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9068x/>

エデンの苑

2011年11月24日21時51分発行